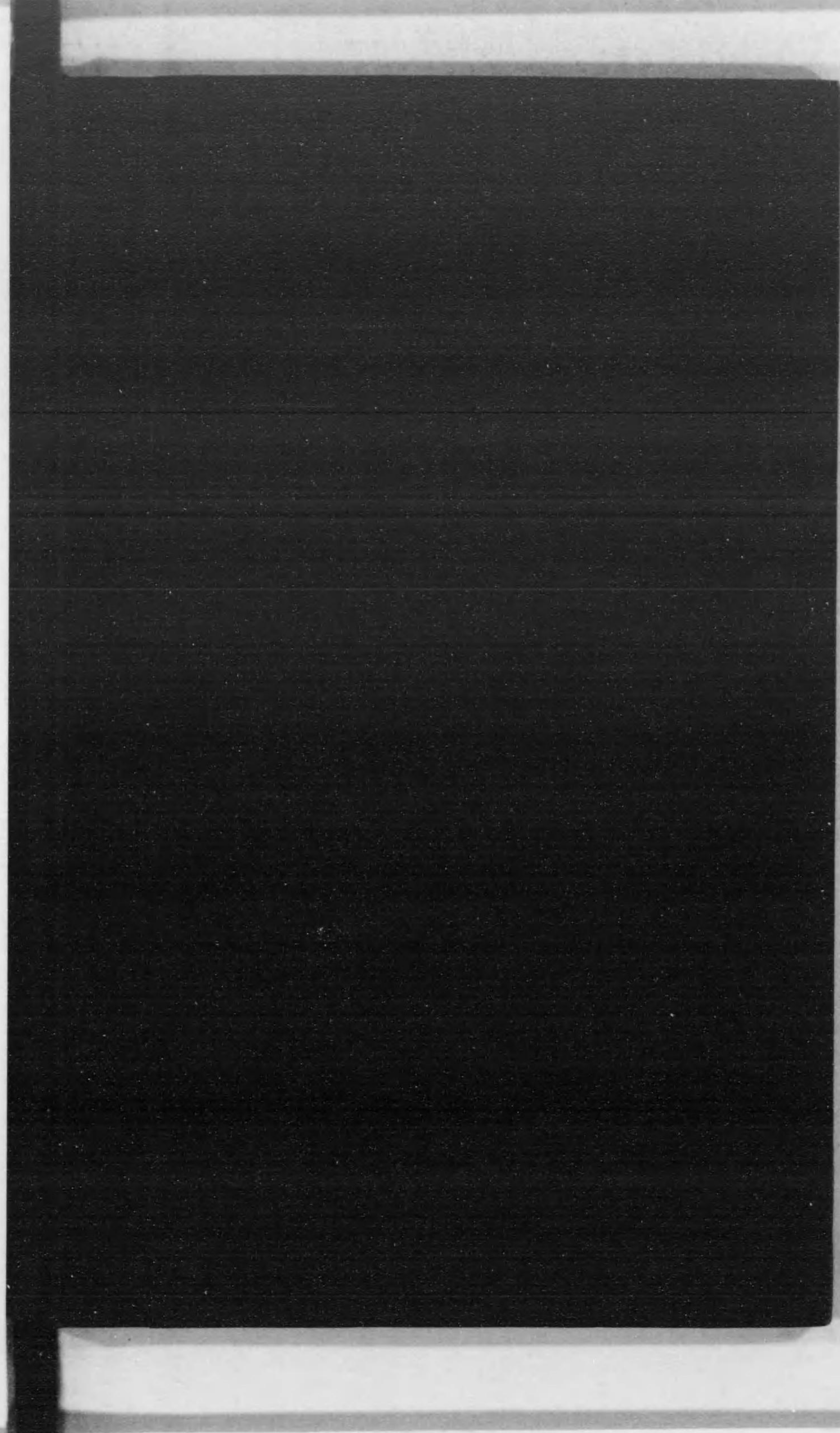


始



323-247



會話捷徑

廣瀨了乘著



序

印度は東洋文明の淵藪なり、特に文學に於ては宇内に冠たり。波邇尼大仙の聲明論一たび出で萬世高標を仰ぐ。西隣安息大食亦別に一旗幟を樹つ。春花爛漫目を奪ふと雖も秋芳亦英を擷むに足る。中古回教の勃興するや東征萬里新月の旌旆を恒河の水上に建つるに至れり、茲に至つて西隣の文學亦梵音に混ず。爾來千年に近く皇帝は概ね回教を奉じ、敕誥令牒多く波斯文を用ふ。梵回既に混じ淳源を散ずと雖も青紅の交はるや紫の美を生ず、又正聲に非ざるも敢て擯すべからず。我邦の印度に負ふや古より佛教の傳來あり、今又農産の巨額を受く。三旬の航程以て雪山恒河に遊

ぶべく菩提樹下に詣すべし。來往漸く繁くして傳譯又便ならず。土音素より馱舌の響なく、語法最も國文に類せり。此を支那語に比するに文字を別つ難ありと雖も亦發音の難澁なく、此を歐語に比するに遙かに容易にして其の差峻嶺を上下するが如し。頃日廣瀬了乘一書を記して『日印會話捷徑』と題し予に示す。百餘の紙片焉ぞ豊美の文を竭さんや。然れども津を問ふの士此に由らば捷徑開いて目に在り、毛孔豈四大海水を容る能はざらんや。茲に數言を陳し以て序とす。

大正五年五月

印度シムラにて

大谷光瑞

緒言

1. 本書は著者が梵語研究の餘暇を偷みて記したるものにして、弱齡末熟乍らも著者の經驗を基礎とし、なるべく吾同胞に剴切適當なりと信ずる方法を用ひ、配列取捨等に於ても多少の注意を拂へり。叙述は平易簡明を主とし、初學者にも理解し易からしむると同時に、尙ほ亦進んで高等なる研究に移るに必要な智識を與ふるを以て旨としたり。

2. 所謂ヒンドゥースターニーとは土語にて亦ウルドゥーと云ふ。西曆七世紀の頃回教徒の大舉東征して印度を侵すや、これと共にアラビア、ペルシアの文學をも併せ傳へ、印度アールヤ民族の本來使用せしヒンドゥー等の如き俗語(プラークリット)と混じて遂に構成せられたる一獨立語なり。地方々言の特に多き印度に於ては、ヒンドゥースターニーは恰かも支那に於ける北京官話の如く、歐洲に於けるエスペラントの如き用をなせり。故に人にして若しヒンドゥースターニーを知れりとせんか、恐らくは印度到る處に於て言語不通より生ずる種々の困難を免かるゝを得ん。

3. 本書編纂に際し、能ふ限り群書を涉獵し、以て獲たるところ頗る多し。その出所の検索し得べきものは一々これを明記してその負ふ所を示し、その然らざるものは、單に書名をのみ掲ぐるに止めたり、讀者請ふこれを諒せよ。この際著者の一言禁ずる能はざるは、内容の配列及び術語の選擇等の點に於て榊博士の名著「解説梵語學」に負へるもの實に大なることは是れなり。記して感謝の意を表はす。

4. 本書を印刷に附するの際、余は遠く異郷に在りて親しく校正の任に當ること能はざるは余の最も遺憾とするところなり。唯だ本書の世に出づるの日、斯學に志すの士に對して多少の便益を供し、誠實なる批評を聞くを得て本書の誤謬を發見し、これを訂正するを得れば著者の本望即ち足る。果して能く斯くの如きを得れば、是れ全く怠惰余の如き者を奮勵鞭撻して茲に到らしめたる大谷猊下の資に外ならず。茲に謹で深く感謝し奉る。

印度詩村にて

大正五年の夏

廣 瀨 生 記

日印會話捷徑目次

| | | |
|------|--|-----|
| 第一章 | ウルド ^o の字母—發音の概要—語勢 | 1. |
| 第二章 | 性、數、格—男性名詞を女性名詞に變化する法 | 5. |
| 第三章 | 名詞的變化—ā, ah 及び父音語基の男性變化—二人稱複數命令法—mat, na の用法 | 11. |
| 第四章 | i 及び父音語基の女性變化—kā, ke, kī の用法—補助動詞 honā の現在—現實法現在—文字排列 | 15. |
| 第五章 | 形容詞の用法—ā 語基形容詞の變化—wān 語基形容詞の變化—名詞との一致—形容詞の比較—比較級及び最上級—achchā, bas, salām の用法 | 20. |
| 第六章 | 複合名詞—接頭辭—名詞形容詞の語基構成音 | 25. |
| 第七章 | 代名詞—人稱代名詞—指示代名詞—尊稱代名詞—āpnā, jī の用法 | 29. |
| 第八章 | 疑問代名詞—不變疑問代名詞—關係照應代名詞—不變關係照應詞—不定代名詞 | 33. |
| 第九章 | 數詞—度量衡と貨幣 | 39. |
| 第十章 | 動詞論 | 42. |
| 第十一章 | 語根語基—可能法現在—現實法未來— | |

| | |
|---|-----|
| 命令法現在—敬稱命令法—半敬稱命令法..... | 46. |
| 第十二章 現在分詞語基—條件法—現實法現在— 現實法半過去..... | 50. |
| 第十三章 過去分詞語基—現實法過去—現實法第 一過去—現實法第二過去—受動調—kih の用 法—ne の用法..... | 53. |
| 第十四章 不定體の用法..... | 58. |
| 第十五章 語根の用法—連續體—sahnā, chuknā の用法—複合動詞..... | 61. |
| 第十六章 催起相—その構成法—格の用法..... | 64. |
| 第十七章 後置詞—副詞—感歎詞..... | 69 |

アクバル大帝とビールバル.
 驢馬と師子.
 二婦人と一赤兒に就て.
 貧しきものゝ安全なる保護者よ。(ウルドゥーの手紙)
 駱駝と驢馬とに就て.
 烏と胡桃と栗鼠と.
 必要なる短文.

引用書目

Forbes, D. The Hindūstānī Manual. New Ed., London.
 Green, A. O. Practical Hindūstānī Grammar. 2 parts,
 Oxford.

| |
|--|
| Rankig, S. A. A Guide to Hindūstānī. 6th Ed., Calcutta. |
| Rogers, E. H. How to Speak Hindūstānī. New Ed., London. |
| Syed, S. B. Hindūstānī Simplified. 2nd Ed., Bombay. |
| Tisdall. Hindūstānī Conversation-Grammar. London. (Method Gaspey-Otto-Sauer). |
| Tweedie, J. Hindūstānī as it Ought to be Spoken. 4th. Ed., Calcutta. |
| 榊博士, 解説梵語學. 第一版, 京都. |

第一章

ウルドゥの字母—發音の概要—語勢

§1. ウルドゥの字母は通例三十五の符號よりなる。母音三、父音三十二、即ち是れなり。今是等の符號を記するに通常波斯字を用ふ、時に *デヅナガリー* 字を用ふることあり。本書にては此等に代ふるに羅馬字を以てす。

(1) 母音 alif (アリフ) wao (ワウ) ye (イエ)

備考—母音の中 i, ī, e, ai は ye; u, ū, o, au は wao; a, ā は alif の字母に一定の符號を加へてこれを示すのみにて別に字母あるに非ず。

(2) 父音.

| 字母 | 語勢 | 字母 | 語勢 |
|-----|-----------|-------|----------|
| be | ブエー b. | re | レー r. |
| pe | プエー p. | ra | 舌音レー r. |
| te | 歯音トエー t. | ze | ズエー z. |
| ta | 舌音トエー t. | zhe | ズイエー zh. |
| se | スエー s. | sin | スイーン s. |
| jim | ジム j. | shin | シェーン sh. |
| che | チュエー ch. | sad | スロッド s. |
| khe | 喉音ホエー kh. | zad | ズアッド z. |
| he | ホエー h. | toe | トエー t. |
| dal | ダール d. | zoe | ズオエー z. |
| da | 舌音ダール d. | 'ain | アイン '. |
| zal | ツアール z. | ghain | グハイン gh. |

| 字母 | 語勢 | 字母 | 語勢 |
|------|--------|-----|--------|
| fe | フェ f. | mīn | ミーン m. |
| quaf | クワフ q. | nūn | ヌーン n. |
| kāf | カーフ k. | wāo | ウオー w. |
| gāf | ガーフ g. | he | ヘー h. |
| lām | ルーム l. | ye | イエー y. |

§2. ウルドゥの發音は日本の文字にて完全に寫さんとするは到底不可能の事に屬す、然れども假名文字を借りて可及的實際に近き音を示さば次の如し。

| | | | |
|------------|-------------------------|------------|-------------|
| b (ブ) | bāp バーブ | sh (シュ) | shahr シュアール |
| p (プ) | pānī プアーニー | ṣ (舌音ズアオ) | ṣulh ズアウルフ |
| t (ツ) | topi トーピー | z (舌音ズアアオ) | zarb ズアアルフ |
| ṭ (舌音ツ) | beṭi ベーティー | ṭ (フエ) | ṭaraf フアラフ |
| ṣ (スイエ) | ṣabit スアピット | z (ズオエ) | zālim ズアアルム |
| j (ヂ) | jurū ジョールー | ' (アイン) | a'māl アーマール |
| ch (チュエ) | chor チュオール | gh (グフ) | ghar グアアル |
| h (喉音フ) | hisab ヒサーブ | f (フ) | fasl ファスル |
| kh (喉音フホエ) | khuda フホーダ | q (グ) | qussa グウサ |
| d (ド) | darwāza { ダールヴァ ザ | k (ク) | kāl カール |
| ḍ (舌音ド) | ḍāl ドール | g (グ) | gidh ギドフ |
| z (ヅ) | zulm ズウルム | l (ル) | larḳa ラルカ |
| r (ル) | rāja ラーチャ | m (ム) | mā マー |
| ṛ (舌音ル) | bheriya ベーリヤ | n (ン) | nahīn ナヒーン |
| z (ズ) | zāban ズアアバン | w (ヴ) | waqt ヴアクト |
| zh (ズエ) | zhāla ズアアラ | h (フ) | hawā ハヴァー |
| s (ス) | sab サブ | y (イ) | yad ヤッド |

§3. 又ウルドゥに於て b, p, t, ṭ, j, ch, d, ḍ, k, 及び g に h を附加して複合文字を作る、則ち—

bh, ph, th, ṭh, jh, chh, dh, ḍh, kh, gh の如し。

この時多く複合文字は含氣音を出す。

§4. 古典、詩歌等に於ては語勢符の所在を嚴密にすれども日常の會話に於ては所謂西洋各國語の如く語勢符を嚴密にせず、略ぼ邦語に似て語勢符の存在を無視せるも尙ほ日常の會話に不便を感じず、然れども全く無きものと思はゞそは誤にして、自然の語勢の抑揚はこれを自然の熟達に求むるより外に方法なかるべし。

第一課 發音練習

Bahut achchhā. nazdik āo. Tumhāra nām kyā hai?
バフート アッチャー ナズイック アーオ ツマーラ ナーム キヤー ハイ

Wuh ādmī kaun hai? Tumhāre ghorē ko yih do.
ヴー アードミー コウン ハイ ツマーレー ゴーレー コ イエー ド

Wuh kiskī beṭi hai?
ヴー キスキー ベティー ハイ

Kisī waqt men kisī ek ṣayyād ne ṭūṭī
キスイー ヴアクト メン(グ) キスイー エーク シヤヤード ネー ドゥドイー
ke āshiyāne ke nazdik jāl bichhāyā aur
ケー アーシイヤーネー ケー ナズイック ジャール ビッチャーヤー アウル

use, us ke bachchon samet, giriftār kiyā.
ウセー ウス ケー バッチョン(グ) サメット ギリフタール キヤー

Usī waqt us ṭūṭī ne āpne bachchon
ウスイー ヴアクト ウス ドゥドイー ネー アプネー バッチョン(グ)

se kahā kih, "Bābā" is waqt maṣlahat yih
セー カハー キー バーバー イス ヴアクト マスラハト イエー

hai kih tum isī jagah murde kī sūrat hokar
 ハイ キー トゥム イスイ チャガ-(ハ) ムルデー キー スーラト ホカル
 par raho. Agar yih chirimār tum ko murde
 パル ラホ アガル イエー チリ-マール トゥム コ ムルデー
 jānegā, to chhor degā. Main tanhā jo
 チャーネーガー ト チョ(ホ)ル デーガー マイン(グ) タ(ン)ナー チョ
 pakrī jā'ūn, to kuchh muzāyaqa nahin.
 パクリー チャーウ-ン(グ) ト クッ(ヒ) ムズ-ヤガ ナヒ-ン(グ)
 Agar main jiti rahūngī, to kisī, na
 アカル マイン(グ) チイ-ティ- ラフ-ンギ- ト キファイ- ナ
 kisī hikmat se āpne ta'in tumbhāre pās
 キスイ- ヒクマツト セー アブネー タ-イン(グ) ツマ-レー パ-ス
 pahunchā'ūngī. Un bachchon ne usī ke
 パフン(グ)チャーウ-ンギ- ウン バッチョ(グ) ネー ウスイ- ケー
 kahne ke bamūjib kiyā. Har ek āpnā āpuā
 カネー ケー バム-ヂブ キヤ- ハル エ-ク アプナー アプナー
 dam churākar gir gayā aur be-ḥarakat ho rahā.
 ダム チュラーカル ギル ガヤ- アウル ベ-ハラカッタ ホ ラハ-
 Pas us sayyād ne ma'lūm kiyā kih, shāyad
 パス ウス シャヤッ-ド ネー マル-ム キヤ- キー シャ-ヤッ
 yih sab mar ga'e hain un ko is dam se
 イエー サ-ブ マール ガエ- ハイ(グ) ウン コ イス ダム セー
 rihā kijiye. Yih kahkar, jonhīn un
 リハ- キーヂ-エ- イエ- カ(ハ)カル チョ(グ)ヒ-ン(グ) ウン
 ko us dam se nikālā, wonhīn wuh har
 コ ウス ダム セー ニカ-デー ヴォ(グ)ヒ(グ) ヴウ- ハール
 ek ur gayā aur ek darakht kī shākh
 エ-ク ウル ガヤ- アウル エ-ク ダラフツト キー シャ-フ
 par jā baithā.
 パール チャー バイター

第二章

性, 數, 格—男性名詞を女性名詞
に變化する法

§5. 名詞, 代名詞及び形容詞は性, 數, 格を追うて變化す。

(1) 性に二種あり, 男性及び女性是れなり。ウルド, に於ては中性なし。

備考—凡そ語典上の性は何れの國語に於ても甚だ形式習慣性のもので多く, 實際これを語典的規則に準じて決する能はず。宜しくこれを字典に問ふべきものなりと雖も, 亦自らその間に一種の規則とも見るべきものあり。今これを示さば次の如し。

(a) 男性名詞

イ 語の男性を示すもの;—

bāp 父親 ghorā 馬(牡) betā (息)
 bheriyā 狼(牡) yogī 瑜伽の行者 mard 人類
 ādmī 男子

ロ ヒンディ語系より來れる ā 語基に終る名詞;—

Khudā 神 hīrā 金剛石 patā 記號, 記念物
 pattā 木葉 *foliage*

ハ 抽象名詞にて āo (ヒンディの āw) に終る名詞;—

chhirkāo 灌水すること chāo 熱望すること
 bhāo 代價

ニ ū 又は o に終る名詞;—

bichchhū 蝸 hasho 寢具の材料

ホ pan を附加して作れる抽象名詞;—

chhotapan 小さきもの, 子供の, 幼きもの bachpan 無邪氣なるもの

(b) 女性名詞

イ 女性を示す名詞;—

| | | |
|------------|----------|---------|
| mā 母 | aurat 婦人 | joru 妻 |
| bahin 姉妹 | āyā 子守女 | betī 息女 |
| ghorī 馬(牝) | | |

ロ i, t, sh に終る名詞;—

| | | |
|-------------|----------|--------------|
| rotī 麵包(パン) | kursī 椅子 | haddī 骨 |
| aurat 婦人 | ātish 火 | ghabrāhat 驚異 |
| banāwat 建設 | guft 演説 | bāt 言葉 |
| bihisht 天 | | |

(例外) 但し以下の語は男性なり;—

| | | |
|-----------|---------|----------|
| pānī 水 | hāthī 象 | bhā'ī 兄弟 |
| dost 友 | gosht 肉 | waqt 時間 |
| sipāhī 兵卒 | motī 眞珠 | |

(2) 名詞相互の關係を示す格には主格, 屬格, 第一業格, 第二業格, 具格, 從格, 於格及び呼格の八種あり. 邦語の所謂「て, に, を, は」に相當する語尾を借りてこれを示す.

イ 主格(語尾變化せず) '人は來る Ādmī atā hai' '鳥は鳴く Chiriyā gātā hai' の文例に於て '人 ādmī' '鳥 chiriyā' の取るべき格, 邦語の 'は' 'が' に當れり.

ロ 屬格(語尾 kā-ke-kī) '人の牡馬 Ādmī ka ghorā' '人の諸の馬 Ādmī ke ghore' '人の牝馬 Ādmī kī ghorī' の場合に於ける 'の' 'に屬する' に當る.

ハ 第一業格(主格に等しく變化せず) '水を呉れ Pānī do' 'その子供に余は書籍を與ふべし Us bete ko kitāb de-ungā' の文例に於ける '水 pānī' '書籍 kitāb' の取るべき格, 邦語の 'を' に當る.

ニ 第二業格(爲格に當る, 語尾 ko) '余に水を與へよ Ham ko pānī do' '子供に書籍を與へよ Bete ko kitāb do' の文例に於ける 'に' 'の爲めに' に當る. (動作の到達點を示す時は亦この格を取る. 例 '家へ往け Ghar ko jāo.')

ホ 具格(語尾 ne) '彼の人によりて見らる Us ādmī ne dekhā' '彼の人によりて飯は食せらる Us ādmī ne khānā khāyā' に於ける 'によりて' に當る.

ヘ 於格(語尾 men 中へ, par 上に, tak 至るまで) '家の内へ Ghar men' '机の上に Mez par' '川に至るまで Nadi tak' に於ける '中に' '上に' '至るまで'

ト 從格(語尾 se) '今日より Āj se' 'その書籍より Yih kitāb se' に於ける 'より' 'から'

チ 呼格(語尾變化なし, 通例 ai, oh 等の感歎詞と共に來る) '吾が子よ Ai merā betā!' 'おゝ神よ Oh dev!'

(3) 數に二種あり, 單數, 複數, 即ち是れなり. 通例單數より複數を作るに以下の四法あり.

イ ā に終る男性名詞は ā を e に變じて複數を作る;— ghorā, ghore; 一匹の馬, 諸の馬.

betā, bete; 一人の息子, 諸の息子.

larkā, larke; 一人の子供, 諸の子供.

kamrā, kamre; 一室, 諸の室.

□ ā 以外の男性名詞は單, 複, 同一なり;—

ghar 一家, 諸の家. admī, (ādmīyān) 一人, 諸の人.

hāthī 一匹の象, 多數の象.

ハ ī に終る女性名詞には ān 又は yān を附加して複數を作る;—

betī, betīyān; 一人の娘, 諸の娘.

rotī, rotīyān; 一斤のパン, 澤山のパン.

larkī, larkīyān; 一人の少女, 諸の少女.

handdī, handdīyān; 一片の骨, 澤山の骨.

ニ ī 語尾以外の女性名詞には en を附加す;—

kitāb, kitāben; 一冊の書籍, 諸の書籍.

aurat, auraten; 一名の婦人, 諸の婦人.

chiz, chizen; 物品, 諸品. bāt, bāten; 一語, 數語.

§ 6. 單數名詞より女性名詞を構成するに以下の法あり.

イ ā 若くは a に終る男性名詞はこれを ī に變じて女性名詞を作る;—

男 ghorā 馬 女 ghorī 牝馬

larkā 子供 larkī 少女

betā 息子 betī 息女

murghā 牡鷄 murghī 牝鷄

bunddhā 老人 buddhī 老婦

chirā 雀 chirī 牝雀

□ 男性名詞にして父音に終る時はこれを ī を附して

女性名詞を作る;—

bandar 猿猴 bandari 牝猿

ahir 牧人 ahiri 牧人の妻

dev 神 devi 女神

kabūtar 鳩 kabūtari 牝鳩

ハ ā に終る男性名詞は ā を除き iyā を附して女性名詞を作ることあり;—

chirā 牡雀 chiriyā 牝雀

bandar 牡猿 bandariyā 牝猿

kuttā 犬 kutiyā, kutyā 牝犬

chuhā 鼠 chuhiyā 牝鼠

būrhā 老人 burhiyā 老婦

ニ yā 又は ī に終りて物品賣買に關する人を表はすべき男性名詞は yā 又は ī を yan, an 又は in に變じて女性名詞を作る;—

baniyā 穀物を賣る者 baniyāyan (baniyā'in) 同妻

barha'i 大工, 木匠 barhin 同妻

nā'i 散髪屋 nayan 同妻

dhobī 洗濯屋 dhobin 同妻

mālī 園丁 malin 同妻

bhā'i 兄弟 bhihin 姉妹

ホ 男性名詞に an, in 及 nī, ānī の語尾を附加して女性名詞を作る;—

sher 虎 shernī 虎(牝)

bagh 虎 baghan 同

mehtar 掃除人 mehtarānī 同妻

| | |
|------------------------------|----------------------|
| ūnt 駱駝 | ūntni 駱駝の牝 |
| dulhā 花婿, 新郎 | dulhin, 花嫁, 新婦 |
| hiran 牡鹿 | hirni 牝鹿 |
| へ 以下の語は男性, 女性, 全く相異なる語を使用す;— | |
| mard 人, 男子 | aurat 婦人 |
| bāp 父 | mā 母 |
| pitā (sanskrit, pitri) 父 | mātā (skr., matṛi) 母 |
| shauhar 夫 | zorū 妻 |
| khāwind 夫 | bibi 妻 |
| sand 牡牛 | gā'e 牝牛 |

雜 語

| | | |
|-------------|------------|-------------|
| larkā 少年 | ghar 家 | gridh 鷲 |
| larkī 少女 | kuttā 犬 | kabūtar 鳩 |
| bāp 父 | bachchā 赤子 | mahārāja 大王 |
| mā 母 | ghorā 馬 | mahārāni 王后 |
| ādmī 人 | khudā 神 | chiriyā 鳥 |
| aurat 婦人 | ghusl 風呂 | aur 又, 而して |
| jangal 森, 林 | pānī 水 | bhī も亦 |

第二課 以下の文を相互に譯すべし

1. Larkā aur larkī. 2. Bāp aur mā. 3. Jangal se chiriyē. 4. Mā larkon ko. 5. Larkiyon kā bāp aur mā. 6. Kabūtar gridh ne. 7. Kuttā kā bachchā. 8. Mahārāja mahārāni se. 9. Ghusl kā pānī. 10. Ghar men. 11. Khudā ke bachche. 12. Ādmī ke ghore ko. 13. Aurat aur kuttā bhī.

- 1.—少年と少女とは. 2.—父と母と. 3.—森より諸の鳥は. 4.—母は子供等を, に. 5.—少女達の父と母とは. 6.—鳩は鷲によりて. 7.—犬の赤兒. 8.—大王は王后より. 9.—風呂の水は, を. 10.—家の内へ. 11.—神の諸の子は, を. 12.—一人の馬を, に. 13.—婦人と而して犬も亦.

第 三 章

名詞的變化—ā, ah 及び 父音語基の

男性變化—二人稱複數命令法—

mat, na の用法

- §7. 名詞と形容詞はその變化全然相同じ, 故に二者の變化を併稱して名詞的變化と云ふ.
名詞的變化の語尾は已に §5. 2 に於て述べたり. 而して主格及び第一業格の如く何等の變化を加へずして格の關係を示すものを今假りに直接格(直)と稱し, 他の屬, 第二業, 從, 具, 於, 等の諸格の如くに語尾を借りて格相互の關係を示すものを假りに間接格(間)と稱すべし.
- §8. ā, ah 語基の男性變化. (larkā 子供, bandah 奴隸)
單數間と複數直とは等しく ā, ah を e に變じ, 複數間に於ては ā, ah を除き on を附加す. ā 及 ah に終る男性名詞の變化は悉く larkā, bandah に準じて知れ.

| 單數 | | 複數 | |
|--------------------------------------|--|-----------|--|
| 直 | { larkā bandah | 直 | { larke bande |
| 間 | { larke bande | 間 | { larkon bandon |
| 主 第一業格 | { larkā 子供は, を bandah 奴隷は, を | 主 第一業格 | { larke 諸の子供は, を bande 諸の奴隷は, を |
| 屬 | { larke kā, ke, ki 子供の bande kā, ke, ki 奴隷の | 屬 | { larkon kā, ke, ki 諸の子供の bandon kā, ke, ki 諸の奴隷の |
| 第二業格 | { larke ko 子供に, を bande ko 奴隷に, を | 第二業格 | { larkon ko 子供を, に bandon ko 奴隷を, に |
| 具格 | { larke ne 子供によりて bande ne 奴隷によりて | 具格 | { larkon ne 子供等によりて bandon ne 奴隷等によりて |
| 從格 | { larke se 子供より bande se 奴隷より | 從格 | { larkon se 子供より bandon se 奴隷等より |
| 於格 | { larke men, par, tak 子供の中へ, 云々 bande men, par, tak 奴隷の中へ, 云々 | 於格 | { larkon par, etc. 子供等の中へ, 云々 bandon par, etc. 奴隷等の中へ, 云々 |
| §9. 父音語基の男性變化 (banyān-穀物賣る人, ghar-家) | | | |
| 直 | { banyān ghar | 直 | { banyen ghar |

間 { banyen+語尾 §5.2 参照 } 間 { banyon+語尾
ghar+語尾 } gharon+語尾

§10. ウルドゥに於て動詞は悉く nā の語尾に終る, これを不定體と云ふ. 今この不定體より nā を除きて吾人は動詞の語根を得べし. 今この語根に o の語尾を附して二人稱, 複數の命令法を得. 會話に於ては専ら複數を用ふ.

例 ānā—ā—āo '來る, 來るべし'
jānā—jā—jāo '行く, 行くべし'
bolnā—bol—bolo '語る, 語るべし'
lānā—lā—lāo '運ぶ, 運ぶべし'

§11. mat, na なる否定助動詞あり. 二人稱複數命令法と共に來る時はその支配する動詞の動作を命令的に否定す. 例へば

來ることはならぬ Mat āo.
語ることはならぬ Mat bolo.
往くことはならぬ Mat jāo.
左様なことをしてはならぬ Aisa kām na karo.

雜語

| | |
|---------------------|--------------------|
| batti ランプ | mez 机 |
| sabr karnā 待つ | khānā 御飯, 御馳走 |
| āj 今日 | taiyar karnā 用意する |
| kamrā 室 | kāl 明日 |
| band karnā 閉める(戸等を) | bazār 市場, バザー |
| nazdik そば | saf karnā 清くす, 掃除す |

| | |
|------------------|-----------------|
| chitthī 手紙, 書付 | sidhā まっすぐ |
| kholnā 開ける | darwāza 戸 |
| jaldī 急いで | denā 興へる |
| garm pānī 熱い水, 湯 | ahista ゆっくり, 遅く |
| bulānā 呼ぶ | dāk-khana 郵便局 |
| idhar こゝへ | lejānā 取り去る |
| chā 茶 | udhar 彼處へ |
| nikālnā 追ひ出す | kewāste 爲めに |
| baithnā 坐わる | rakhnā 置く |

第三課

1. Batti lāo. 2. Khūnā taiyar karo. 3. Ghushl kewāste garm pānī lāo. 4. Kitāb mez par rakho. 5. Kursī par baitho. 6. Nazdik āo. 7. Sabr karo. 8. Ghar ko jaldī jāo. 9. Idhar ao. 10. Darwāza band karo. 11. Darwāza ahiste kholo. 12. Chitthī jaldī dak-khane men lejāo. 13. Sidhā jāo. kuttā kamre se nikālo. 14. Āj mat āo. 15. Idhar mat baitho. 16. Larkon ko kitāben do. 17. Larkiyon kī mā aur larkon kā bāp bulāo. 18. Kamre men saf karo.

1.—ランプを持つて来い。2.—御飯を用意せよ。3.—風呂用として湯を持つて来い。4.—書籍を机の上に置け。5.—椅子の上に坐わりなさい。6.—そばへおいで。7.—お待ち。8.—家へ急いで行け。9.—こゝへ来い。10.—戸を閉ぢよ。11.—戸を静かに開けよ。12.—手紙を急いで郵便局へ持つて行け。13.—まっすぐに往け。14.—犬を室

から追ひ出せ。14.—今日は来てはなりません。15.—此へ坐わることはならぬ。16.—子供達へ書籍を與へよ。17.—少女達の母と子供達の父とを呼べ。18.—室内を掃除せよ。

第四章

i 語基及び父音語基の女性變化—

kā, ke, kī の用法—補助動詞

honā の現在—現實法現在—文字排列

§12. i 語基の女性變化. (larkī 少女)

單數に於て直, 間, 共に變化なく, 複數間に於て ān を除く. i に終る女性名詞は悉く larkī の如く變化す.

| | |
|------------|-----------------------|
| 單 數 | 複 數 |
| 直 larkī | 直 larkiyān (§5.3 ハ参照) |
| 間 larkī+語尾 | 間 larkiyon+語尾 |

§13. 父音語基の女性變化 (凡そ父音語基の女性變化は aurat に準ず).

| | |
|------------|----------------------|
| 單 數 | 複 數 |
| 直 aurat | 直 auraten (§5.3 ヲ参照) |
| 間 aurat+語尾 | 間 auraton+語尾 |

§14. 已に屬格は kā, ke, kī の語尾によりて表はさるべきを述べたり. 今三者の用法を詳説すべし.

(1) kā の用法, 男性名詞に先つ;—

例 Sahib kā ghorā. 旦那の馬.

Aurat kā ghorā. 婦人の馬.

Aurat kā betā. 婦人の息子.

以上の文例に於て ghorā, betā は等しく男性なり, 故に kā を用ふ. 屬格を支配する sāhib (男), aurat (女) の性には何れも無關係なるに注意するを要す.

(2) ke の用法に二種あり.

イ 男性複數名詞に先つ;—

例 Sahib ke ghore. (§ 5. 3 イ参照) 旦那の諸の馬は.

Aurat ke ghore. 婦人の諸の馬は.

Aurat ke bete. 婦人の息子達は.

ロ 語尾變化をなせる單, 複, 兩數の男性名詞に先つ;—

例 Sahib ke ghore par. 旦那の馬の上に.

Sahib ke ghore se. 旦那の馬なり.

Aurat ke ghore ko. 婦人の馬に.

Aurat ke beton ko. 婦人の息子達に.

Aurat ke beton se. 婦人の息子達より.

(3) ki の用法, 單, 複, 兩數の女性名詞に先つ;—

例 Sahib ki kitāb. 旦那の書籍.

Ādmī ki betī. 人の息女.

Aurat ki kitāben. 婦人の諸の書籍.

Aurat ki kitābon se. 婦人の諸の書籍より.

Aurat ki betiyān. 婦人の娘達は.

§ 15. 補助動詞 honā '存在す' 'ある' は最も必要なる補

助動詞の一つなれば暗記するを要す, その現在變化は次の如し;—

一人稱 { 單 Main hūn. (ham hai とも云ふ) 余はあり.
複 Ham hain. 我等はあり.

二人稱 { Tu hai. 汝はあり.
専ら複數を用ふ { Tum ho. 汝達(お前達)はあり.

三人稱 { Woh hai. 彼はあり.(彼女はあり, 云々)
彼, 彼女, それ { Woh hain. 彼等はあり.(彼女達はあり, 云々)

§ 16. 動詞の不定體より nā を除きてその語根を得ること既に § 10 に於て述べたり, 今この語根に tā を附加して動詞の現在分詞を得. 即ち;—

jānā—jā—jātā '行きつゝ'

Bolnā—bol—boltā '語りつゝ'

ānā—ā—ātā '來つゝ'

Karnā—kar—kartā '爲しつゝ'

かくして得たる現在分詞に § 15 にて述べたる honā の現在變化を附して現實法の現在動詞を作る. この時動詞を支配する名詞, 代名詞にして若し女性なる時は單複共に tā は ti に, 男性複數なれば te に變ず.

| | 男性 | 女性 |
|-----|---|-----------------------------|
| 一人稱 | { Main boltā hun. (Ham boltā hai.) Ham bolte hain. | { boltī hun. boltī hain. |
| 二人稱 | { Tu boltā hai. Tum bolte ho. | { boltī hai. boltī hain. |
| 三人稱 | { Woh boltā hai. Woh bolte hain. | { boltī hai. boltī hain. |

備考—二人稱單數は會話に於て多く用ひず、複數を專用せり。

§17. ウルドゥに在りて一文に於ける文字排列法は頗る邦文に似たり。今その文體を概説すれば 主格——目的格若くは賓辭——叙述動詞となすを得べし。今邦文と比較對照すれば下の如し。

- {その¹ 馬は² 佳く³ ありませぬ⁴.
 {Yih¹ ghorā² achchhā³ hai nahin⁴. (nahin hai とも云ふ)
 {私は¹ 私の² 家へ³ 參ります⁴.
 {Ham¹ āpne² gharko³ jātā hai⁴.
 {貴下は¹ 何を² して³ ゐますか⁴.
 {Tum¹ kyā² karte³ ho⁴.
 {この馬は¹ あの馬より² 速かに³ 走ります⁴.
 {Yih ghorā¹ us ghore se² jaldi³ daurtā hai⁴.

雑 語

| | | |
|-----------------|---------------|------------------------------|
| darakht 樹 | barā-i 大きい | nahin いゝえ |
| log 人間 | chhotā-i 小さい | kyā 何 |
| sāya 樹蔭 | burhā-i } 年若い | kahān 何處 |
| chauki ベンチ, 腰掛け | buddhā-i } たる | koi 誰か |
| nām 名前 | kharab 悪い | kuchh 何も, 何か |
| murghī 牝鶏 | achchhā-i 善い | bahūt 大變, 澤山 |
| mulūm 承知すること | khubsūrat 美しい | ham 私, 私等 |
| bachchā 赤兒, 幼兒 | badsurat 醜い | tum 前達 |
| thandā 冷い | jawān, 若い | woh { 彼, 彼女, それ, { 彼等, 云々 |
| garm 熱い | hān はい, 左様です | sah 皆 |

第四課 會 話

su'al 問

jawāb 答

1. Bāp aur mā kahān Woh abhi ghar men hain.
hain?
2. Larke aur larkiyān Nahin, woh us darakht ke
apne ghar se nikāl sāye se nikāl āte hain.
āte hain?
3. Yih murghī jawān hai? Nahin, bahūt buddhī.
4. Is bachche kā kyā nām Is kā nām ham ko malūm
hai? nahin hai.
5. Chauki kahān hai? Us darakht ke sāye men hai.
6. Is aurat khubsūrat hai? Nahin, bahūt badsūrat hai.
7. Yih pāni garm hai? Nahin, bahūt thandā.
8. Tum kahān rahte ho? Ham Bombai men rahtā hai.
9. Woh ādmī kaun hai? Woh ādmī merā dost hai.
10. Tum kyā karte ho? Kuchh nahin kartā hai.
Tum kyā kartī ho?
11. Koi ādmī us ghar men Koi ādmī nahin rahtā hai.
rahtā hai?
12. Sab log kahān jāte Us shahr men jāte hain.
hain?

第五章

形容詞の用法—ā 語基形容詞の變化—
wān 語基形容詞の變化—名詞との一致—
形容詞の比較—比較級及び最上級—
achchā, bas, salām の用法

§ 18. 形容詞の用法に二種あり、一は一女の賓辭として用ひらるゝ場合にして即ち“馬は黒し Ghorā kālā hai”の場合に於ける‘黒, kālā’の如き即ち是れなり、他は名詞の形容附加辭として用ひらるゝ場合にして“黒き馬 kālā ghorā”“黒き牝馬 kālī ghorī”の場合に於ける“黒き, kālā, kālī”の如し。何れにするも形容詞は名詞の性、數、格に一致す。

§ 19. ā 語基形容詞の變化。男 achchhā. 女 achchhī “佳き” (男性變化に於て單數間接格 及び複數直接格間接格共に ā は e に變じ、女性變化に於ては變ぜず)

| | | | | | |
|-------|---|----------|-----|---|----------|
| 直 (男) | { | achchh-ā | (女) | { | achchh-ī |
| | | achchh-e | | | achchh-ī |
| 間 (男) | { | achchh-e | (女) | { | achchh-ī |
| | | achchh-e | | | achchh-ī |

例 Achchhā larkā. 佳き一人の子供は。
Achchhī larkī. 佳き一人の少女は。

Achchhe larke ko. 佳き一人の子供に, を。
Achchhi larkī ko. 佳き一人の少女に, を。
Achchhe larke. 佳き諸の子供は
Achchhi larkiyān. 佳き諸の少女は。

等しくまた

Chhotā betā. 小さい息子は。
Chhoti beti. 幼ない娘は。
Chhote bete se. 小さい息子より。
Chhoti beti se. 幼ない娘より。
Chhote bete. 小さい諸の子供は。
Chhoti betiyān. 幼ない諸の娘は。
Chhote beton ko. 小さい諸の子供に, を。
Chhoti betiyon ko. 幼ない諸の娘に, を。

§ 20. wān 語基形容詞の變化。男 panchwān, 女 panchwīn “第五番目。”

| | | | | | |
|---|---|------------|-----|---|------------|
| 直 | { | panchw-ā-n | (女) | { | panchw-ī-n |
| | | panchw-e-n | | | ” |
| 間 | { | panchw-e-n | (女) | { | ” |
| | | panchw-e-n | | | ” |

§ 21. ā 及び wān に終らざる他の形容詞は何れの性、數、格に於ても變化せず。

例 { Garm pānī. 熱い水は, 湯は。
Garm pānī se. 熱い水より。
Khubsūrat aurat. 美しい婦人は。
Khubsurat aurat ko. 美しい婦人に, を。

§ 22. 邦語に於て‘あの家はこの家より大なり’‘あの

家は最も大なり'の文に於て前者は相對的比較を示し
後者は絶對的比較を示す。前者を比較級と稱し後者を
最上級と呼ぶ。

§ 23. ウルドゥに於て比較級は比較標準の語に従格 se を
附して作る。

Yih ghar us ghar se barā hai. 'この家はその家よりも
大きい.'

Ghorā hāthī se chhotā hai. '馬は象よりも小さい'

Yih aurat us aurat se khubsurāt hai. 'この婦人はその婦
人よりも美しい.'

Ek sadiq dost bhāī se afzal hai. '一人の親友は兄弟に
勝る.'

§ 24. 最上級は比較標準の語に通例 sab se '總てより'
を附して作る。

Merā kamrā us kamre se barā hai. Tumhāra kamrā sab
se barā hai. '私の室はその室よりも大きい。御身の
室は最も大きい。(總てより大きい)

Yih ghorā sab se achchhā hai. 'この馬は最も佳い。(總
てより佳い)

Woh aurat sab se khubsurāt hai. 'その婦人は最も美な
り。(總てより美なり)

§ 25. achchā, bahut achchhā, bas '充分なる'等の形容
詞は時に自己と同等,若くは以下の人に對して感謝の
意を表はすに用ひらる。その意 mihrbānī に同じ。

{ Sahib, Āp garm pānī mangte hain? 'あなた,湯は如何
でございますか.'

{ Achchhā, denā. '有難う,下さい.'

{ Aur dusrā? 'もう一杯如何ですか.'

{ Bas. 'もう充分,有難う.'

§ 26. Salām なる語あり,日常挨拶の辭として用ひらる。
詳かにこれを云へば Salām-'alaikum '御身の上に平和
あれ'となる。

'Salām o 早う' (朝), 今晚は (夕), o 休み (晩), 御
機嫌よう, 左様なら (別離), 今日 (晝), の諸義に用ひら
る。

雑語

| | | |
|--------------------|--------------|-----------------------|
| achchhā 佳い, 善い | sāf 清潔なる | uttar(shamāl) 北 |
| kharrāb 悪い | mailā 不清潔なる | dakhan (janūb) 南 |
| ūnchā 高い | mushkil 困難なる | pūrab (mashrik) 東 |
| nicha 低い | salis 容易なる | pachchham (maghrib) 西 |
| barā 大きい | mahngā 高價なる | pahār } 山 |
| chhotā 小さい | sastā 安價なる | girī } 山 |
| bahut 澤山の | andherā 暗い | nadī 河 |
| thorā 少量の | dānā 賢明なる | surāj 太陽 |
| motā 肥えたる | sufed 白い | chānd 月, 太陰 |
| patlā 痩せたる | kālā 黒い | sarp 蛇 |
| lambā 長い | nilā 青い | rāstā 道路 |
| kotāh 短い | lāl 赤い | chahnā 昇る, 上る |
| qusmat 運命 | sabz 緑の | utarna 沈む, 下る |
| haulnāk 恐るべき, 恐ろしい | | |

第五課

1. Yih achchhā (kharāb) ādmī hai. 2. Achchhe larkon ko bulāo. 3. Woh aurat kharāb (achchhī) hai. 4. Himālaya sab pahār se ūnchā. 5. Gangā nadī sab se lambā. 6. Yih murghī us se motī (patlī) hai. 7. Kamre men sāf karo, bahut mailā hai. 8. Āj kāl se thandā (garm) hai. 9. Yeh chīz bahut mahngā (sastā) hai. 10. Surāj aur chānd pūrab se charhte aur pachchham men utarte hain. 11. Qusmat hi sāb se haulnāk hai. 12. Yih sāb se lambā (kotah) ādmī hai. Yih rāstā sab se barā. 13. Mere ghar men bahut andherā hai. 14. Sufed phul. 15. Kālā sarp. 16. Nilā girī. 17. Sabz ghās. lāl chiriya. 18. Achchhā, dusrā dekho. 19. Bas, salām.

1. 一彼れは善い(悪い)人です。 2. 一善い子供達を呼べ。 3. 彼の婦人は悪い(善い)。 4. 一雪山は總ての山より高い。 5. 一恒河の川は最も長い。 6. 一この牝鶏はそれよりも肥えて(瘦せて)ゐます。 7. 一室内を掃除せよ。大變不潔だから。 8. 一今日は昨日よりも寒(熱)い。 9. 一それ等の品物は、大變高價(安價)だ。 10. 一太陽と月とは東より上り、而して西に沈むものなり。 11. 一運命こそは最も恐るべきものなれ。 12. 一彼は最も長身(短身)なり。この道は最も大なり。 13. 一余の家の内は大變暗い。 14. 白い花。 14. 一黒い蛇。 16. 一青い山。 17. 一緑草、赤い鳥。 18. 一有難う、外のを見せて呉れ。 19. 一有難う、左様なら。

第六章

複合名詞—接頭辭—名詞形容詞の
語基構成音

§ 27. ウルドゥに於て複合名詞を作るに以下の法あり。

(1) 屬格的複合詞。屬格 kā, ke, ki 若くは屬格に相當するものを用ひて名詞を複合せしむ。

イ 屬格 kā, ke, ki を用ひて複合せしむるもの；—
sone kā kamrā. (§ 14 (1) 及び § 65 參照) 寢る爲めの室、
寢室。

kane kā kamrā. 飯を食ふ室、食堂。

mez kā kaprā. テーブルの爲めの衣、テーブル掛け。

kane ki mez. (§ 14. (3) 參照) 飯を食ふ机、食卓。

ロ 時として屬格を用はずして屬格的複合名詞を作る；—

phul-bāgh 花の園、花園。

sora-topi 日光を防ぐ一種の帽。

ハ アラビア語 'ud' を用ひて屬格複合詞を作る。'ud' によりて作られたる複合名詞は多くアラビア、ペルシアの高貴の尊稱に用ふ。

shams-ud-din 信の榮光。

ニ ペルシア語 'i' を用ひて屬格的複合詞を作る；—
kaisar-i-hind 印度の王。 arkān-i-daulat 國家の柱石。

(2) 相違的複合詞. ペルシア語 'o' を附して作る. 之を分離する時は aur の如き接續詞を要す.

khās-o-ām 貴族と平民, 國民一般.

bāgh-o-bahār 庭と春. (著名なる書目)

§ 28. 接頭辭を語根又は語基に附加してその意義を補足し限定し變更することあり, 今その主要なる接頭辭の數種を擧ぐれば;—

(1) nā 非ず, 否定す. (例) 'pāk 清潔. nā-pāk 不清潔.' 'rāst 正しい. nā-rāst 不正なる, 不正直.' 'ummed 希望. nā-ummed 絶望' 等の如し.

(2) be 外に, 離れて, 無くして. (例) 'be-waqt, 時間外に.' 'be-kār 仕事無しに, 無職.' 'be-fikr 思慮無き.' 等の如し.

(3) kam 缺亡せる. (例) 'kam-'aql 無智, 智の缺亡せる.' 'kam-rāh 遅々たる, 速力の缺亡せる.'

§ 29. 名詞, 形容詞若くは動詞に語基構成音を附加してその語基を作る. 今その語基構成音を大別すれば;—

(1) 類似を表はす語基構成音. 'sā 似たる' (名詞及び代名詞に附加して形容詞を作る. 而して形容詞に附加せらるゝ時は形容詞の意味を強む. 名詞に附加する時は直接格に, 代名詞には間接格 (§ 33 参照) に附加す. āchchā に準じて變ず. (§ 19 参照)

例 haiwān 野獸. haiwān-sā ādmī. 野獸の如き人.

chānd-sī aurat. 月の如き婦人.

haiwān-se mardon se. 野獸の如き人々より.

betā-sā 息子に似たる.

Phūl-sī meī larkī. 實に花にも似たる吾が親しき少女.

Mujh-sā bechārā ādmī. 余に似たる不幸なる人.

Muallim apne bete-se shāgird ko piyār kartā hai. 師は吾子の如く弟子を愛す.

Barā-sā-se-sī. 實に大なる.

備考—sā にしてペルシア及びアラビア語に附加せらるゝ時は sān 又は sār となる. 'sher-sān 虎に似たる,' 'shāh-sār 王らしき' の如し.

(2) bān, wān, kār, gār, ār, 及び walā (§ 68 参照) は動作の主體たる名詞, 動作の名稱その他種々の義を有する名詞を作る語基なり.

例 pās bān 傍にて守る者, 警護の士.

bāgh-wān 庭園にて仕事するもの, 園丁.

sitam-gār (sitam-kār) 壓制する者, 暴君.

gunāh-gār 罪人. kharīdār 買ふ人.

āne-walā 來る人. roti-walā パンを焼く人, パン屋

machhli-walā 魚を捕る人, 漁師.

dak-walā 郵便脚夫. jāne-walā 行く人, 旅行者.

likhne-walā 書く人, 小説家.

likhne-walī 閨秀作家 chhotā-walā 小さい品.

achchhā-walā 佳良なるもの, 佳品.

備考—walā は 男性に就て larkā (§ 8) の如く, 女性に就て larkī (§ 12) の如く變化す.

(3) istān, stān, zār, sār, shan を附して國土, 地所に關する名詞の語基を作る;—

Hindū-stān ヒンドゥ教徒の住む地, 印度.

Afghan-istān アフガン民族の郷土.

gul-istān 薔薇園. gul-zār 薔薇園の一部

gul-shan 薔薇咲く處, 薔薇花園.

雑語

| | |
|------------------|------------------|
| phul 花 | pahārī 山(梵語より出づ) |
| darakht 樹 | janwar 獸類, 野獸 |
| mulk 國 | pakarnā 捕へる |
| raksās 羅刹鬼 | jazirā 島 |
| Rāmā ラーマー王 | band karnā 幽閉する |
| lankā ランカ(錫蘭の古名) | lūtna 強奪す |
| Sitā ラーマー王の妃 | koh 山(波斯語より出づ) |
| chānd 月 | mewā 果實 |

第六課

1. Sone ke kamre men saf karo. 2. Mez kā kaprā dhobī ko do. 3. Auratsā ādmī. 4. Phul sī larkī. 5. Janwarsā yeh log shahron ko lūte kiyā the. 6. Raksas Rāmā kī barī bibī chāndsī sitā pakar-kar Lanka jazire ko jate aur ek kamre men band kiyā. 7. Hī bahutsī mewā is darakht men hain. 8. Pahārī mulk ko bolte hain kih "kohistān."

1. 一寢室を掃除せよ. 2. 一テーブルクロスを洗濯屋に出して呉れ. 3. 一婦人の如き男. 4. 花に似たる美しき少女. 5. 一野獸の如きこれ等の人々は町々を襲ひて強奪

するを常とせり. 6. 一羅刹鬼はラーマー王の正室, 月の如きシーターを捕へてランカ島に伴れ往きて一室の内に幽閉せり. 7. 一實に多數の果實がその樹にあります. 8. 一山國を人はコヒスタンと呼ぶ.

第七章

代名詞—人稱代名詞—指示代名詞— 尊稱代名詞—apnā, jī の用法

§ 30. 代名詞に以下の六種あり;—

- | | |
|-----------|-----------|
| (1) 人稱代名詞 | (4) 疑問代名詞 |
| (2) 指示代名詞 | (5) 關係代名詞 |
| (3) 尊稱代名詞 | (6) 不定代名詞 |

§ 31. 人稱代名詞. 一人稱, 二人稱の變化. (名詞的變化にその變化を等しくするに注意せよ)

| | | |
|----------------|--|---------------------|
| | 一人稱 <small>(會話に於て多 く複數を用ふ)</small> | 二人稱 („) |
| 主 | 單 main (ham) '余は' | { tu (tain) '汝は' |
| | 複 ham | { tum |
| 屬 | { merā, re, rī '余の' | { terā, re, rī '汝の' |
| | { hamhārā, re, rī | { tumhārā, re, rī |
| 第一 第二 業格 | { mujh ko (mujhe) | { tujh ko (tujhe) |
| | { '余に, を' | { '汝に, を' |
| | ham ko | tum ko |

| | | |
|---|------------------------|------------------------|
| 具 | { main ne (ham ne) | { tu ne |
| | { '余によりて' | { '汝によりて' |
| 從 | { ham ne (hamhon ne) | { tum ne (tumhon ne) |
| | { mujh se '余より' | { tujh se '汝より' |
| 於 | { ham se (hamhon se) | { tum se (tumhon se) |
| | { mujh men '余の中に' | { tujh men '汝の中に' |
| | { ham men (hamhon men) | { tum men (tumhon men) |

§ 32. 三人稱及び指示代名詞の變化. yih '彼, 彼女, これ' woh '彼, 彼女, それ'

| | | |
|---|-----------------------------|---------------|
| 直 | { 單 yih | { woh |
| | { 複 yeh | { woh |
| 間 | { is+語尾 (§ 5 (2) 及び § 7 参照) | { us+語尾 (,) |
| | { in+語尾 | { un+語尾 |

備考—以上の如き正式變化以外に單數第一及び第二業格に於て ise, use となり, 複數第一及び二業格に於て inhen, inhon ko; unhen, unhon ko; 及び複數具格に於て unhon ne, となることあり.

§ 33. 若し yih, woh にして三人稱人稱代名詞として用ひらるゝ時は語尾は直接代名詞に, 指示代名詞として用ひらるゝ時は語尾はその指示する名詞に附せらる.

イ 代名詞として用ひらるゝ場合.

例 これは私の兄弟です. Yih merā bhā'i hai.
 彼女は私の妹です. Woh merī bhahin hai.
 彼等は私の友達です. Yeh mere dosten hain.

彼れに書籍を與へよ. Us ko kitāb do.

ロ 指示代名詞として用ひらるゝ場合.

あの婦人は私の妹です. Woh aurat merī bhahin hai.
 この家はあの家より大きい. Yih ghar us ghar se barā hai.

その家には誰れがゐますか. Us ghar men kaun hai.

§ 34. āp なる代名詞あり, 本來は '自ら' の義を有すれども又 khud, hāzūr の語と共に二人稱の尊稱代名詞として用ひらる, āp の '自ら' の義を有する時は於格は āpasmen となる.

Ham āp jāungā. 私は自ら参りましょう.

Main āp us ko dekhtā hai. 私は自身で彼れを見ます.

Āp ki kyā rāe hai. 貴下の御意見は; 貴君はどんな御意見ですか.

Āp kā nām kyā hai. 貴下のお名前は.

Hāzūr kā ghar kahān hai. 閣下のお宅は何處にございますか.

§ 35. āpnā なる語あり, āp の屬格にして '自らに屬する' の義を有す. 常に主格に伴はれて主格の表はす所有の義を示す. 支配する名詞の性, 數, 格と一致す.

例 Ham apnī kitāb parhtā hai. 私は私の書物を読む.

Woh apni kitāb parhtī hai. 彼女は彼女の書物を読む.

Woh apnā kām kartī hai. 彼女は彼女の仕事をなす.

Āp āpne bāp ke ghar ko jāte hain? 貴下は貴下の父方の家へ参りますか.

§ 36. ji なる語あり. hān ‘左様です’ の敬稱として用ひられ, 時に或る名詞に附して邦語の ‘様, さん’ の如き意味を生ず.

例 bābū ji お役人様. māli ji 園丁さん.
bāp ji お父さん.

雑語

| | | |
|------------------------|--------------------|-----------------|
| paisā 銅貨, お錢 | jhagrā 争ひ | piyar karnā 愛する |
| nakd 現金 | bimār 病氣 | bulānā 呼ぶ |
| band-o-bast 閉ぢ且つ整ふ, 整理 | dawā 藥 | |
| jāgānā 起す, 覺す | bajā 時間 | naukar 召使 |
| sat 七 | chāhnā 愛する | sawere 早朝 |
| bāp-mā 兩親 | liye, kewāste の爲めに | |
| āp se 己れの意に従ひて | | |

第七課

1. Yih ghorā merā hai. Yih merā ghorā hai. 2. Tum se kyā bolte ho. 3. Main āpnā ghorā āpne liye chahtā hun. 4. Woh ādmī us kī bhāin kewāste ek kitāb detā hai. 5. Woh āpna naukar bulātā hai. 6. Us ko nakd men paisā do. 7. Ham ko sawere sat baje jagao. 8. Do auraten ek bachche kewāste āpas men jhagrā kartī hain. 9. Tum āpas men band-o-bast karo. Woh aurat āp se āp kām karegā. 10. Bāp-mā āp ke bachche ko piyar karte hain. 11. Bāp ji, tu kahān jātā hai?

1.—この馬は私のです。これは私の馬です。 2.—お前

は何を云うてゐるのですか。 3.—私は私の馬を自分の爲めに愛します。 4.—彼の人は彼の姉妹の爲めに一冊の書籍を與へます。 5.—彼れは彼の召使を呼びます。 6.—彼れに現金でお錢を與へよ。 7.—私を早朝七時に起して呉れ。 8.—二人の婦人は一赤兒の爲めに彼等の間にて争ふ。 9.—お前方は各自にて(物の)整理をなさざるべからず。彼の婦人は己が意志通り仕事をするでしょう。 10.—兩親はその子を愛す。 11.—お父さん, あなたは何處へ往くの。

第八章

疑問代名詞—不變疑問代名詞—

關係照應代名詞—不變關係照應詞—

不定代名詞

§ 37. 疑問代名詞に二種あり, 一は kaun ‘誰れ’ を以て人に對する疑問代名詞に用ひ, 他は kyā ‘何’ を以て物, 即ち無生物に對する用語とす.

§ 38. kaun ‘誰れ’ の變化. (名詞の變化に類似せるに注意せよ)

| | |
|------------|---------------------------|
| 單 | 複 |
| 直 kaun | kaun |
| 間 kis + 語尾 | kin (kinhon 具格にのみ用ふ) + 語尾 |

備考—直接格に sā を附加して疑問形容詞を作る。

例 kaunsā ghar ‘どちらの家.’ (§ 29 参照)

§ 39. kyā ‘何に’の變化.

直 kya kya

間 kāhe+語尾 kāhe+語尾

備考—kis は時に kyā の間接格 kāhe の代理をなすことあり。尙ほ kāhe ko (第一及び第二業格) ‘は何故に, 何の爲めに’の代りに ‘kis wāste, kis liye, kyūn’ を用ふることあり。

§ 40. 以下の不變疑問詞は副詞として用ひらる。

1. 時—kab いつ

Kab tum mere ghar ko āoge. ‘いつお前は私の家へ参りますか.’

2. 場所—kahān 何處

Tum kahān rahate ho. ‘お前は何處に住んでゐますか.’

3. 動作—kidhar 何處へ

Tum kidhar jate ho. ‘お前は何處へ行きますか.’

4. 状態—kaisā 如何なる状態, 種類

Tu kaisā hai. ‘お前はどうか.’ (挨拶辭)

5. 數量—kitnā どれ程の

Kitnā shakhs us shahr men hai. ‘いくら程の人があの町に居りますか.’

6. 質量—kittā どれ程の

Kittā dudh tum ke pās hai. ‘どれ程の牛乳を所持してゐますか.’

§ 41. ウルドゥに於て名詞及び代名詞の關係は通例關係

詞 jo 又は jaun を先に, 而して so, taun 若しくは第三人稱か又は指示代名詞を關係詞の照應詞として後に用ひ, 前の關係詞と互に照應してこれを示せり, その變化殆ど他の名詞, 代名詞の變化に同じ. この關係詞照應詞にして形容的に使用せらるゝ時は語尾はこれを形容する名詞に附す. (§ 33 参照)

§ 42. 關係詞 jo, jaun の變化.

單 複

直 jo (又は jaun) jo (又は jaun)

間 jis+語尾 jin+語尾

備考—單數第二業格に於て jise, 複數屬格に於て jinhon kā, 第二業格に於て jinhen となることあり. (§ 32 備考参照)

§ 42. 照應詞 so, taun の變化. (§ 32 参照)

直 so (又は taun) so (又は taun)

間 tis+語尾 tin+語尾

備考—單, 第二業にて tise, 複, 屬, にて tinhon kā, 第二業に於て tinhen となる. (§ 42 備考参照)

Jo shakhs dānā hai, so kam boltā. ‘人にして智あるところ (jo) のもの (so) は多く語らず.’ (智者は黙す)

Jo ādmī darwāze par hai, us ko bulāo. ‘戸口に立てるところの人 (jo) 彼を (us ko) 呼べ.’

Yih woh larkā hai, jis ko ham ne ek kitāb dī. ‘これはその子供なり, その子供に (jis ko) 余が一冊の書籍を與へたるは.’ (これは余が一冊の書籍を與へたる子供なり)

§ 43. 意味を強むる爲めに關係詞を重複することあり.

Jo jo chizen mere pās thīn, un sab ko unhon ne leliye.

‘余が曾て所有せし物品のその總てを彼等は強奪し去れり。’

§ 44. 以上の不變關係照應詞は副詞として用ひらる。

1. 分量 jītnā—itnā.

Jitnā dudh itnā do. ‘乳のあるだけそれだけ呉れ。’

2. 類似 jaisā—taisā (waisā)

Jaisā dil taisā zaban. ‘心のあるところ舌これに従ふ。’

3. 時 jab—tab.

Jab tum āoge tab tum dekhoge. ‘お前の來らん時この時お前は見るべし。’

4. 場所 johān—tabān.

Jahān tum gāye tabān main bhī gayā. ‘お身の行きし所余も亦行きぬ。’

5. 動作 jidhar—tidhar.

Jidhar tum jāoge tidhar main bhī jāu gā. ‘お身の行く所へ余も亦往かん。’

§ 45. 不定代名詞 koī, kuchh 前者は時に人稱代名詞又は形容詞として又時に指定せるものを示すに用ひられ、後者は抽象代名詞として量を示す, nahin を伴ふ時は絶無の意を示す。

| | |
|--|--------|
| 單 | 復 |
| 直 koī | koī |
| 間 kisi+語尾 | kin+語尾 |
| Us ghar men koī nahin hai? ‘その家には誰れも居りませぬか。’ | |

Koī ādmī bulāo. ‘誰れか呼んで呉れ。’

Us ne kisi kī āwāz sunī. ‘彼は誰れかの聲(女性)を聞けり。’

Ham ne kisi kitāb men parhā hai. ‘余は或る書物の中にて讀めり。’

Koī nahīn ātā aur main kuchh nahīn suntā hun. ‘誰れも來らず、而して余は何等聞くところなし。’

§ 46. 不定代名詞の一種に ka’i, ka’i ek の語あり、邦語にて數多(あまた)と譯すべし。

Us nadi ke kanāre par ka’i ek ām ke darakht hain. ‘彼の河の岸の上には數多のマンゴー樹あり。’

§ 47. 以下の語は koi, kuchh より構成せる複合不定代名詞なり。

Dūsra koī. 他の誰れか。

Dūsra koī bulāo. ‘他の誰れかを呼べ。’

Sab koī, har koī. 誰れもかれも。

Sab koī āpne gharon ko chalegae. ‘誰れもかれも皆彼等の家に還り去りぬ。’

Sab kuchh, har kuchh. 何もかも。

Sab kuchh lejāo. ‘何もかも取り去れ。’

第八課

1. Woh ādmī kaun hai. 2. Kis ko yih kitāb dete ho.
3. Jis shakhs ko woh kitāb milī woh abhī ātā hai. 4. Tum ne kin ādmīon ko dekhā.
5. Tum kis kām kewaste āte ho. 6. Tumhārā nām kyā hai. 7. Woh kām kis kis

liye kiyā gayā. 8. Kaumsā ghar ko tum jāte ho. 9. Āj woh bimār bachchā kaisā hai. 10. Jo tum kahte ho so sach hai. 11. Jis shakhs ko tum ne kal shahr men dekhā so āj fajr ko margayā. 12. Jahān gul tahān khar bhī hai. 13. Jaisā malik taisā naukār. 14. Jo yih chīz achchhī nahin to dusrī ek dekho. 15. Us kām se kuchh faidā nahin hai. 16. Har koī gharib ko ek ek paisā dete hain.

1. 一彼の人は誰れですか。 2. 一誰れにこの書籍を與へますか。 3. 一その書籍を得たる人は只今参ります。 4. 一貴下はどんな人達を見たか。 5. 一お前はどんな用事で来たのか。 6. 一貴下の名前は何んと云ひますか。 7. 一その仕事はもも々々何の目的にて爲されたのか。 8. 一どちらの家へ参りますか。 9. 一今日はあの病氣の子供の様子はどうか。 10. 一お前の話すことは眞實です。 11. 一貴下が昨日町で見たところのその人は今日の朝に死にました。 12. 一薔薇のあるところ刺亦あり。 13. 一主人の爲すところ僕これに倣ふ。 14. 一若しこの品物が悪いならばそれでは他のもう一つを見せて呉れ。 15. 一その仕事より何等の利益も擧らず。 16. 一總ての人々は貧民に一錢づゝ與ふ。

第九章

數詞一度量衡と貨幣

§ 48. 數詞の中先づ 1 より 10 までを擧ぐれば;—

| | |
|---------------------|--------------------|
| 基数 1. ek (skr. ekā) | 序數第一 pahlā (女—i) |
| 2. do (dvī) | 第二 dūsā (”) |
| 3. tin (tri) | 第三 tīsā (”) |
| 4. chār (chatur) | 第四 chauthā (”) |
| 5. pānch (pancha) | 第五 panchwān (—win) |
| 6. chhe (sas) | 第六 chhathā (—g—) |
| 7. sāt (saptan) | 第七 sātwān (—win—) |
| 8. āth (aṣṭan) | 第八 āthwān (,,) |
| 9. nau (navan) | 第九 nauwān (,,) |
| 10. das (dashan) | 第十 dāswan (,,) |

§ 49. 11 より 18 までは rah 及び dah を附す.

| | |
|-------------|------------|
| 11. gyārah | 20. bis |
| 12. bārah | 30. tis |
| 13. terah | 40. chālīs |
| 14. chaudah | 50. pachās |
| 15. pandrah | 60. sāth |
| 16. solah | 70. sattar |
| 17. satrah | 80. assī |
| 18. athārah | 90. nawe |
| 19. unnīs | 100. sau |

| | |
|------------------|-----------------------|
| 1000. hazār | 110. ek sau das |
| 10000. das hazār | $\frac{1}{4}$, pao |
| 100000. lākh | $\frac{1}{2}$, ādhā. |

§49. 度量衡と貨幣

(1) 尺度

今日多く英國の尺度を用ふ。

(2) 重量

tola = 約三匁強

seer = 80 tola = 約二百四十匁

maund = 40 seer = 約九貫六百匁

(3) 貨幣

銀貨に屬するもの：—

rupee = 16 anna = 約六十四錢

$\frac{1}{2}$ rupee = 8 anna = 約三十二錢

$\frac{1}{4}$ rupee = 4 anna = 約十六錢

$\frac{1}{8}$ rupee = 2 anna = 約八錢

銅貨に屬するもの：—

anna = 4 pice = 12 pie = 約四錢 (白銅)

$\frac{1}{2}$ anna = 2 pice = 6 pie = 約二錢

$\frac{1}{4}$ anna = 1 pice 3 pie = 約一錢

備考—15 留比(ルピー)を以て英貨一磅に換算す、邦貨の約九圓八十錢弱に當る。(爲替關係の爲め日々變動し一定せざるも概數を示す)

(1) 郵 税

イ 郵便端書 = $\frac{1}{4}$ anna, 往復端書 = $\frac{1}{2}$ anna.

ロ 封書 1 tola まで = $\frac{1}{2}$ anna; 1 tola 超過して 10 tola

まで = 1 anna; 10 tola を超過する毎に 1 anna を増す。

ハ 英國領土は總て 1 ちんす(約七匁五)までは 1 anna.

ニ 英國領土以外の外國.

端書 1 anna; 1 封書 1 ちんす毎に $2\frac{1}{2}$ anna (約十錢).

(2) 電信料

イ 内地電報. 普通電報 12 字まで = 6 anna, 一語を加ふる毎に $\frac{1}{2}$ anna, 至急電報 12 字まで = 1 rupee, 一語を加ふる毎に 2 anna を増す.

ロ 外國電報. 歐洲方面行一語毎に 1 rupee 6 anna, アジア方面行一語毎に 1 rupee 4 anna を増す。(經由する線路により一定せず)

雜 語

| | | |
|----------|---------------|------------|
| dām 代價 | ānkh 目 | piyāz 玉葱 |
| dam 瞬間 | nāk 鼻 | ba'd 後 |
| baras 年 | kān 耳 | sāmhne 前に |
| din 日 | pānw 足 | gharib 貧しき |
| hāth 手 | bajā 時間 | ālū ポテト |
| thik 正しく | brahmin 婆羅門の妻 | |

第九課

1. Āpne pānch doston ke sath merā bāp shahr ko gayā.
2. Ek baras men tīn sau painsath dīn hain.
3. Ādmī ne kahā kih main do ānkh, do hāth aur pānw aur kān, aur ek nāk pās hai.
4. Abhī kitnā bajā?
5. Thik tīn baje hai.
6. Ālū aur piyāz kitnā seer hai?
7. Ek ek dās seer hai.

8. Ek maund kitnā dām? 9. Chheh rupyā ek maund.
10. Rājā sahīb roz roz shahr men gharīb ādmī ko ek ek
rupyā diyā karte hain. 11. Ek dam ke na'd ek brahmin
us ke sāmhue āyā.

1. 一自分の友達五人と共に余の父は町に往けり。 2. 一
一年中には三百六十五の日あり。 3. 一人は云ふ人は二つ
の目と二つの手と足と耳と而して一つの鼻を持つと。 4.
一只今何時ですか。 5. 一丁度三時です。 6. 一ポテトと
玉葱は何セールあるか。 7. 一各十セールあります。 8. 一
一マウンドの價は? 9. 一マウンド六留比です。 10. 一
王様は毎日町に於て貧民へ各一留比づゝ與ふるを例とせ
り。 11. 一瞬時の後婆羅門の妻は彼の前に來りぬ。

第 十 章

動 詞 論

§ 52. ウルドゥに於て動詞は比較的單純にして僅に § 58
備考に於て述べたる六つの不規則動詞を除き多は悉く規
則的變化をなす。今動詞をやゝ學究的に分解すれば動詞
には二種の相あり。

- (1) 原始相 私は往く, 往けり; 彼は死す, 死せり等。
(2) 催起相 私は彼をして喜ばしむ, 喜ばす等。

§ 53. 相毎に二種の調あり。

1. 能動調 { イ 他動調 '彼れは余を打てり'
 { ロ 自動調 '余は眠る, 鳥は鳴く'
2. 受動調 '彼は余によりて打たる'

§ 54. 調に四種の法と三種の體あり。

- 法 { 1. 現實法 '彼は往く, 往かん'
 { 2. 可能法 '彼は往き得べし'
 { 3. 命令法 '汝往くべし, 彼をして往かしめよ'
 { 4. 條件法 '彼往きしならば'

- 體 { 分詞體 { イ 現在分詞
 { ロ 過去分詞
 { 不定體
 { 連續體

§ 55. 法に以下の時あり。

命令法-現在

可能法 { 現在
 { 未來

現實法 { 現在
 { 半過去
 { 過去

現實法 { 第一過去
 { 第二過去
 { 第一未來
 { 第二未來

§ 56. 以上の時を作るに大略以下三種の語基を要す。

- (1) 語根を語基とするもの。(不定體より nā を除ける
語根を語基とす。§ 10 参照)

イ 可能法現在

ロ 現實法第一未來

ハ 命令法現在

(2) 現在分詞を語基とするもの。(現在分詞, 語根 + tā を語基とす, §16 参照)

イ 條件法

ロ 現實法現在

ハ 現實法半過去

(3) 過去分詞を語基とするもの。(過去分詞, 語根 + ā を語基とす)

イ 現實法過去

ロ 現實法第一過去

ハ 現實法第二過去

§57. 語基に附すべき語尾は honā の時に應じて變化せるものを云ふ。語尾の中に單, 複の兩數あり。數に第一, 二, 三人稱の別あり。性に男性, 女性の區別あり。

第十課 動詞變化の一覽表

(1) 規則的變化.

1. 不定體——nā に終る.

2. 語根——不定體より nā を除く.

3. 現在分詞——語根 + tā (tī)

4. 過去分詞——語根 + ā (ī)

5. 催起相 { 第一 ———— { 語根 + ā (lā)
 { 第二 ———— { 語根 + wā (§82)

6. 命令法未來——不定體を用ふ. (§66)

7. 可能法現在—語根 + un, e, e, en, o, en. (§58 イ)

8. 語根 命令法現在—語根 + un, (缺), e, en, o, en. (§58 ハ)

9. 現實法未來—語根 + ūngā, egā, egā, enge, oge, enge. (§58 ロ)

10. 條件法—現在分詞の儘を用ふ. (§59 イ)

11. 現在分詞 現實法現在—現在分詞 + honā の現在. (§59 ロ)

12. 現實法半過去—現在分詞 + honā の過去. (§59 ハ)

13. 現實法過去—過去分詞の儘を用ふ. (§60 イ)

14. 現實法第一過去—過去分詞 + honā の現在. (§60 ロ)

15. 過去分詞 現實法第二過去—過去分詞 + honā の過去. (§60 ハ)

16. 受動調—過去分子 + jānā の變化. (§61)

17. 連續體—語根 + kar, 又は 語根 + rahā honā の變化. (§77)

18. 敬稱命令法—語根 + iye, (又は jīye) iyo.

(2) 不規則變化. (§60 備考参照)

| 不定體 | 語根 | 現在分詞 | 過去分詞 | 敬稱命令法 |
|----------|-----|-------|------|--------|
| 1. denā | de | detā | diyā | dijiye |
| 2. honā | ho | hotā | hū'ā | hujiye |
| 3. jānā | jā | jātā | gayā | ja'iye |
| 4. karnā | kar | kartā | kiyā | kijiye |
| 5. lenā | le | letā | liyā | lijiye |
| 6. marnā | mar | martā | mū'ā | mujiye |

(3) 補助動詞 honā の變化.

| | 現在 | 過去 | 現在 | 過去 |
|-----|-----|-----------|------|------------|
| 一人稱 | hun | thā (thī) | hain | the (thīn) |
| 二人稱 | hai | thā (thī) | ho | the (thīn) |
| 三人稱 | hai | thā (thī) | hain | the (thīn) |

第十一章

語根語基—可能法現在—現實法未來—

命令法現在—敬稱命令法—

半敬稱命令法

§ 58. 語根語基. 不定體 honā 語根 ho ‘存在す’
 ,, bolnā ,, bol ‘語る’

イ 可能法現在. ‘余は存在すべし, 語り能ふ.’

| | | |
|-----|-------------------------------|-----------------------------------|
| 一人稱 | { main houn, hon bol-un | { ham howen, hoen, hon bol-en |
| 二人稱 | { tu ho-we, ho-e, ho bol-e | { tum ho bol-o |
| 三人稱 | { woh ho-we, hoe, ho bol-e | { woh howen, hoen, hon. bol-en |

例 Abhī main jāūn (janā) sahib? ‘旦那, 只今出て参つてよろしうございますか.’

Jo kuchh woh bole so jhuth hai. ‘たとへ彼が何んと云ふことが出来てもそれは虚説だ.’

ロ 現實法未來. ‘余は存在せん, 語らん’

單數女性の時 *gā* を *gī* に, 複數女性に於ては *ge* を *gīn* に變化す.

| | | |
|-----|-----------------------|------------------------|
| 一人稱 | { ho-ūngā bol-ūngā | { ho-wenge bol-enge |
| 二人稱 | { ho-egā bol-egā | { ho-oge bol-oge |
| 三人稱 | { ho-wegā bol-egā | { ho-wenge bol-enge |

例 Main āpne bāp ko ek chitthī likhungā. (likh-nā) ‘余は余の父へ一通の手紙を書くべし.’

ハ 命令法現在. ‘余をしてあらしめよ’, ‘語るべし.’

殆ど可能法現在とその變化を等しうす. だゝ單數二人稱に於て可能法は *e* の語尾を附すれど命令法單數二人稱に於ては語尾の儘用ふ. 多く複數二人稱を用ふ.

例 Tum wahān jāo. ‘お前あそこへ行け.’
 Churi lāo. ‘ナイフを持つて來い.’

ニ 動詞の語根に *iye* 若くは *iyegā* を附加して敬稱命令法を作る. 語根の *i* に終るものは *jiye* を, *e* に終るものは *e* を *i* に變じて *jiye* を附す.

例 baithnā, baithiye. ‘坐し給ふべし.’

rahnā, rahiye. ‘棲み給ふべし.’

pīnā, pījiye. ‘お飲み下さい.’

lenā, lijiye (lejiye). ‘お取り下さい.’

denā, dijiye. ‘與へて下さい.’

Jo in men se āp ko chāhiye so lejiye (lījiye). ‘この中

から御身の好きなものをお取り下さい。’

Sahib, sharab pīiyegā. ‘旦那、酒は召しませんか。’

ホ 半敬稱命令法は語根に ‘iyo’ を附して作る, iye, iyegā の如き鄭重のものに非ず。

例 Kal us ādmī ko mere pās laiyo. ‘明日あの人を余のそばへ連れて来て下さい。’

雑語

| | | |
|----------------|-------------|-------------|
| jānā 往く | khelnā 遊ぶ | chalnā 歩む |
| rahnā 棲む | uthnā 起きる | lānā 運ぶ |
| jannā 知る, 承知する | parhnā 讀む | chahnā 希求する |
| bolnā 語る | dekhnā 見る | sawere 早朝 |
| likhnā 書く | khānā 食ふ | naukar 召使 |
| sikhnā 學ぶ | pīnā 飲む | karnā 爲す |
| sikhānā 教へる | Sanskrit 梵語 | bimār 病氣 |
| durust 眞實, 正しき | | |

第十一課

1. Jo āp likhen so durust hai. 2. Jo tum is chiz ko khāo to bimār hojāo. 3. Agar ham is ghar men rahen to us ko dekhenge. 4. Woh aurat dudh pīegi. 5. Tum kyā khāoge. 6. Jo huzur chaliye to ham bhī challenge. 7. Jo woh mujhe na dekhe to main kyā karun. 8. Ham ko ek achēbhā naukar chaliye. 9. Bas, abhī tum jāo. 10. Tum kab mere kapre lāoge. 11. Ham kal āpne doston ke sath cricket khelenge. 12. Tum us aurat ko janiye.

13. Tum Sanskrit sikhā sakte ho, kyūnkeh tum us ko likho aur parh. 14. Tum sawere men utho.

1.—御身のお書きになることは何でも正しい。2.—若し貴下がこの物を食ひしならば必ず (to) 病氣になつたでしょう。3.—若し私等がこの家屋に棲んでゐたならば必ず彼れを見ることが出来ましたでしょう。4.—彼の婦人は乳を飲むでしょう。5.—貴下は何を召上りますか。6.—若し閣下にしてお歩きになるならば私共も歩きましょう。7.—若し彼れにして余を見ること能はざる場合は (to) 余は如何に爲し得べきぞ。8.—余に一人の良い召使は必要なり。9.—もうそれで結構, さあお還り下さい。10.—お前はいつ私の衣類を持つて来て呉れるのか。11.—私共は明日友達共と一緒にクリケットを遊びましょう。12.—貴下は彼の婦人を知らざるべからず, 知り給へ。13.—貴下は梵語を教授することが出来ます, なんとすれば貴下には梵語を書き且つ讀むことが出来になるから。14.—お前は朝早く起きよ。

第十二章

現在分詞語基—條件法—現實法現在
—現實法半過去

§ 59. 現在分詞語基. boltā. (現在分詞 hotā)

イ 條件法, 現在分詞の儘を用ふ '若し余をして在らしめば, 語らしめば.'

(單數女性に於て tā は ti に, 複數女性に於て te は tin に變ず).

| | | |
|------|---------|-------|
| 一、二、 | { hotā | hote |
| 三入稱 | { boltā | bolte |

條件法は實際の事實に反せる假定及びその假定に基づいて生ぜる結果を表はすに用ひらる.

例 Agar ham yih jāntā to ham kabhī nahin jātā. '若し余にしてこれを知りたりしならんには余は決して往かざりしものを.' (然れども余はこれを知らずして行きぬ)

Agar woh suntī to mujh ko boltī. '彼の女にして若し聞きたりしならんには余に語りしならん.'

備考—條件法に於て agar—to '若し然る時は' の照應せるに注意せよ.

ロ 現實法現在. '余はあり, 語る' (§ 16 參照)
(單數, 複數何れも女性に於て tā は ti に變ず)

| | | |
|------|----------------------|--------------------|
| 一、二、 | { hotā + honā の現在變化 | hote + honā の現在變化 |
| 三入稱 | { boltā + honā の現在變化 | bolte + honā の現在變化 |

現實法は現在動作を示すに用ひらる.

例 Tum kyā karte he. } 'お前(貴女)は何をしてゐますか.'
Tum kyā kartī ho. }

ハ 現實法半過去. '余はありき, 語りたることありき.'

單 復

| | | |
|------|-------------------------|--------------------------|
| 一、二、 | { Hotā thā (hotī thī) | { Hote the (hotī thīn) |
| 三入稱 | { Boltā thā (boltī thī) | { Belte the (boltī thīn) |

Do auraten ek bachche kewaste āpas men jhagrā kartī thīn. '二婦人は一赤兒の爲めに相互に争を爲したることありき.'

Tumhārā bāp jis waqt āyā main ek chitthī likhtā thā. 'お前の父の來れるその時余は一通の手紙を書きつゝありき.'

雜語

| | |
|------------------------|-----------------------|
| musawwir 畫家 | khān 回教徒の尊稱 |
| bāt 言葉 | junūbī kohistān 南方の山國 |
| Sevajee 人名 | lutnā 掠奪し強姦す |
| hamrāh と共に | rahnā 棲む |
| pahāri qaum 山蠻, 山賊 | jama karnā 強奪す |
| hākīm 會長, 大將 | mutī karnā 征服する, 歸順する |
| lashkar-i-jarrār 多くの兵士 | de-karnā 指揮す |
| rawāna 動員 | charhāi karnā 征討す |

第十二課

1. Agar is kā musawwir sher hotā to aisā na hotā. 2. Main aisī bāten kabhī nahin boltā. 3. Jaisā woh kahtā thā waisā ho-gayā. 4. Woh achchhlī kitāben parhtā hai. 5. Main nahin jantā hun.

6. Sevajee ke hamrah pahāri qaum bahut thī, jo junūbī kohistān men raktī hain. Yeh log shahron ko lutte aur rupia jama karte the, kih Bijāpūr ke hākīm ne un ke muti karne ke wāste ek lashkar-i-jarrār Afzal khān ko de-kar Sevajee par charhāi karne ko rawāna kiyā.

(Guide to Hindūstāni. p. 229)

1.—若し畫家にして虎ならんには應にかくあるべからず。2.—余はかくの如き言葉を決して語らず。3.—彼れが語りたるが如くに事は起れり。4.—彼れは良き書籍を讀む。5.—余は承知せず。

6.—南方の山國地方に棲めるところの山賊はセヅヂーと共にその數多かりき。これ等の者共は町を強奪し(婦女を)強姦し、且つ金銀を強奪せり。その結果(kih) ビージャーポール國の王は彼等を征服する爲め一群の大兵を率ゆるアフツールカンをしてセヅヂーに對し征服せしむべく動員を行ひぬ。

第十三章

過去分詞語基—現實法過去—現實法

第一過去—現實法第二過去—受動調—

kih の用法—ne の用法

§ 60. 過去分詞語基. 'bolā.' (過去分詞 hu'ā)

イ 現實法過去. '余はありき, 語りき'

| | | |
|-------------|---------------|----------------|
| 一、二、 三人稱 | { hu'ā (hu'ī) | { hu'e (hu'in) |
| | { bolā (bolī) | { bole (bolin) |

例 Ek sher aur ek mard ne āpnī taswir ek ghar men dekhī. '一匹の虎と一人の男は彼等自ら或る家の内にて畫を見たりき.'

備考—以下の語は不規則變化をなす。

| | | |
|----------|-------------|------------------------|
| denā 與ふる | diyā (dī) | dījiye |
| honā 存在す | hu'ā (hu'ī) | hūjiye |
| jānā 往く | gayā (ga'ī) | gā'iyē |
| karnā 爲す | kiyā (kī) | kījiye (kariye, 古典に用ふ) |
| lenā 取る | liyā (lī) | lījiye |
| marnā 死す | mu'ā (mu'ī) | mūjiye |

ロ 現實法第一過去. '余は今居りぬ, 語りぬ'

| | | |
|-------------|------------------------------|------------------------------|
| 一、二、 三人稱 | { hu'ā (ī) + honā の現在 (§ 15) | { hu'e (ī) + honā の現在 (§ 15) |
| | { bolā (ī) + „ | { bole (ī) + „ |

現實法第一過去は動作の完成, 不完成を論せず現在と

その一般觀念を接續す。

例 Woh abhī gayā hai. ‘彼れは只今往きぬ。’

Hazrat jibrā'il Qur'ān ko āsman men se lāyā hai.

‘ハズラートジブラーイルは聖典コーランを天國より降せり。’ (今も現に)

ハ 現實法第二過去。‘余は曾てありき’ ‘語りき’

| | | |
|-------------|-----------------------|------------------------|
| 一、二、 三人稱 | { Hu'ā thā (hu'i thī) | { Hu'e the (hu'i thīn) |
| | { Bolā thā (boli thī) | { Bole the (boli thīn) |

例 Ek ūnt aur gadhā barē dost the. ‘一匹の駱駝と驢馬は曾て大なる親友なりき。’

Main āpne bāp ko chitthī likhā thā. ‘余は余の父の許へ手紙を曾て書けり。’

§61. ウルドゥに於て受動詞は多く用ひず。今その構成法を述べれば過去分詞語基に jānā ‘往く’ の變化を附加してこれを作る。

Main gayā jāungā. ‘余は往かざるべし。’

Tum gayā jāte ho. ‘御身は往かざるべし。’

Woh gayā jātā. ‘彼れ若し往かされしならんには。’

Woh kām kis kis liye kiyā gayā hai. ‘その仕事は實に何の目的の爲めに爲されたるにや。’

§62. 邦語にては“余は行くべし”と彼れは語りぬ。‘彼れは往くべしと語りぬ’の文例に於て前者は當事者の言行を直接に第三者が引用せる場合にして、後者は當事者の言行を第三者が間接に當事者に代りて述べたるものなり。前者を假りに直接法と呼び、後者を間接法と稱すべし。

今ウルドゥにては一文の中に於て全く間接法を用ひず。その間接法なる時はこれを直接法に改めて譯し且つ語らざるべからず。kih は直接法に於て關係詞 jo の如き用をなす。例を以てこれを示さば

Us ne kahā kih ham āpnī chitthī likhungī. ‘余は余の手紙を書くべしと彼は語りぬ。’

Us ne kahā kih main āpne ghar men jāungā. ‘余は余の家に還るべしと彼は語りぬ。’

§63. 動詞に他動調、自動調の別あること既に §53 (1) に於て述べたり、而して亦自動詞の支配せらるゝ主格に一致すること既述の如し。然るに他動調動詞にて過去分詞を基語とする‘時’に用ひらるゝ時は他動調動詞は過去受動の意味に用ひらる。この時自動調主格は變じて具格 ne を取り動詞は目的格に一致す。

イ 現實法過去。

Us ne woh ādmī dekhā. ‘彼れによりてその男は見られたり。彼れはその男を見たり。’

Main ne āpnī chitthī likhī. ‘余によりて余の手紙は書かれたり。’

備考一邦語に譯する時は假りに目的格に業格 ko を相ふか、尙ほ別に主格を補足する時は容易に解するを得べし。即ち；—

Us ne woh ādmī dekhā = Woh us ne woh ādmī ko dekhā.

Main ne āpnī chitthī likhī = Main main ne āpnī chitthī ko likhī. (Woh woh ādmī dekhā; main āpnī chitthī likhī. は誤りなり)

□ 現實法第一過去.

Us ne woh ādmī dekhā hai. '彼れは彼の男を今見たり.'
 Khudā ne muqaddas injil ko hamārī hajāt keliye nazal
 famāyā hai. '神によりて、聖書を吾々の解脱の爲めに
 天降し給ひぬ。(今も現に)

ハ 現實法第二過去.

Us ne woh ādmī dekhā thā. '彼れは彼の男を見たること
 ありき.'

§ 64. 現在分詞及び過去分詞は時に形容詞として用ひら
 る。この時 honā の過去分詞 (§ 60) は現在及び過去分
 詞語基に附加せられて名詞に先づ。

Us ne zamīn par ek likhā hū'ā kāghaz dekhā. '彼れは地
 上に於て字の書かれたる紙一通を見たり.'

Abhī main kisī na kisī rote hū'e bachche kī āwāz suntā
 hūn. '只今私は或る泣き叫ぶ赤兒の聲を聞きます.'

§ 65. 過去分詞語基に chāhnā '希望する' を附して希
 望の意を示し, karnā '爲す' を附加して動作の習慣性
 を示す。

例 Woh ādmī Hindūstānī ko sikhā chāhtā hai. '彼の人
 はヒンドゥスターニーを學ぶべく願ふ.'

Woh aurat āpne ghar ko gayā chāhtī thī. '彼の婦人
 は自分の家へ還るのを希へり.'

Main har fajr men akhbar parhā kartā hun. '余は
 毎日朝の間に新聞を読むのを常としてゐる.'

雜 語

| | | |
|------------------|--------------|-------------|
| shakhs 人 | ajā'ib 不思議 | salāmat 完全に |
| aflātūn プラト-、人名 | jawāb 應答 | pūchhnā 尋ねる |
| bars 年、歳 | yihī それ、その | kinārā 岸、海岸 |
| daryā 海 | ajūba 驚異、不思議 | safar 旅、航海 |
| pahunchnā 達する、著く | | |

第 十 三 課

Ek shakhs ne aflātūn se⁽¹⁾ pūchhā kih⁽²⁾ tum ne babut
 barson daryā kā safar kiyā. Daryā men kyā kyā ajā'ib
 dekhe. Aflātūn ne jawāb diyā kih⁽²⁾ yihī ajūba dekhā
 kih⁽²⁾ main daryā se kināre ko salāmat pahunchā.
 (Practical Hin. Gram. p. 59).

1. (§ 81 (5) □) 2. (§ 60)

或る人はプラト-氏に '御身は多年航海を爲せり、海
 上に於て如何なる不思議をば御身は見たるか' と尋ねた
 りき。プラト-氏は下の如き (kih) 答を與へき。 '余が
 海より岸に完全に到着せしと云ふその不思議なることを
 ば余は見たり' と。

第十四章

不定體の用法

§ 66. 動詞の不定體は命令法未來として用ひらる。

例 Khabar-dar, wahān mat jānā. ‘注意してそこへ往かない様に.’

Kal mere ghar ko ānā. ‘明日私の家へお出で下さい.’

§ 67. 不定體は時に抽象名詞として用ひらる。間接格に於て nā は ne となる。

例 Uskā likhnā kharāb hai. ‘彼の書くこと(筆蹟)は下手だ.’

Us kā parhnā bahut achchā hai. ‘彼れの読み方は大變良い.’

Mere jāne keliye riksāw taiyar karo. ‘私の出發の爲めに人力車を用意せよ.’

Is ko jāne ko bolo. ‘彼れに往く様に云へ.’

Ham jāne ko mangtā hai. ‘私は往きたい.’

§ 68. 不定體に walā を附して不定體の表はす代理名詞を作る, この時 nā は ne に變ず. [§ 29 (2) 及び備考参照]

例 bolne walā. 説く人, 説教師, 説教者.

likhne walī. 閨秀作家.

§ 69. 不定體に動詞 denā の變化を附して許可の意を示

す. 主格は變じて爲格となり nā は ne に變ず.

例 Mujh ko bolne do. ‘余をして語らしめよ.’ ‘余に語るべき許可を與へよ.’

Ham ko bolne do. ‘吾人をして語らしめよ.’

Main ne us ko jāne diyā. ‘余は彼れをして往かしめたりき.’

§ 70. 不定體に lagnā ‘始まる’を附加して動作の開始を示す. (nā は ne となる)

例 Woh jāne lagī. ‘彼の女は往き始めぬ.’

Main bolne lagā. ‘余は語り始めたりき.’

§ 71. 不定體に pānā ‘許さる’を附加して許可の義を示す. (nā は ne となる)

例 Main bolne pātā hun. ‘余は語るべく許可せらる, 余は語り能ふ.’

Woh jāne pātī hai. ‘彼女は往くべく許さる.’

§ 72. chāhnā の敬稱命令 chāhiye は不定體に附加せられて必要, 希望の意を表はすことあり. この時主格は爲格となる.

例 Mujh ko bolnā chāhiye. ‘余に語るべき必要あり.’ ‘余は語らざるべからず.’

Us aurat ko bolnā chāhiye. ‘彼の女は語らざるべからず.’

Mujh ko jānā chāhiye. ‘余は往かざるべからず.’

備考—chāhiye は時に關係詞 kih (§ 62) を借りて上記と同意義に用ひらる.

例 Chāhiye kih tum karo. ‘お前の爲すこと (kih) は必

要なり.’ ‘汝は爲さざるべからず.’

Chāhiye kih tum jāo. ‘汝は行かざるべからず.’

§73. 不定體は hogā を伴ひて半命令法を作ることあり.

Main jānā hogā. ‘余は往かざるべからず.’

Woh āj jānā hogā. ‘彼は今日往かざるべからず.’

第十四課

1. Is aurat ko ghar men jāne do. 2. Mere bāp ne mujhe yih kitāb parhne di. 3. Merī mā ne us ko newā khāne diyā. 4. Woh āne pāege. 5. Ham bolne pātī hai. (pātā hai.) 6. Woh larkī rone lagtī hai. 7. Chahiye kih khawind bibī ko piyar karo. Bibī ko chahiye kih āpne khawind piyar karo.

1.—この婦人をして家の内へ入らしめよ。2.—余の父は余の爲めにこの書を読ましめたり。3.—余の母は彼れをして果實を食せしむ。4.—彼れは來るべく許可せられん。5.—妾は(余は)語ることを許可せらる。6.—彼の少女は泣き始む。7.—夫は妻を愛せざるべからず。妻は夫を愛せざるべからず。

第十五章

語根の用法—連續體—sahnā, chuknā

の用法—複合動詞

§74. 動詞の語根に ‘kar’ ‘ke’ 又は ‘rahā + honā’ の變化を附して動詞の連續體を作る。

例 Woh yih bāt bol-kar chālā gayā. ‘彼れはこの言葉を語りつゝ出て行きぬ.’

Gadhā khā-pī-kar (khā-kar aur pī-kar, khā-pī-kar) khub motā hu’ā. 驢馬は食ひ且つ飲みつゝいと麗

はしく肥えぬ。

Woh ādmī jā rahā hai. ‘彼の人は行きつゝあり.’

Woh aurat bol rahī hai. ‘彼の婦人は語りつゝあり.’

備考—現在分詞は時ありて動作の進行を示すことあり、この時現在分詞は間接格を取る。

例 Ek aurat rotī ranji-uthātī, jangle men jā-kar, is men us ke Bachche ko chhor-di thī. ‘一婦人は泣きつゝ且つ悲みつゝ林の中に往きてその中へ彼の女の子を捨て終りぬ.’

§75. 動詞語根に sahnā を附して語根の表はす動作の可能を示す。

例 Ham bol saktā hai. ‘余は語り能ふ.’

Ham bol sakte hain. ‘吾人は語る事が出来る.’

Woh aurat jā sakki. '彼の婦人は行き能ひし.'

§76. 語根に chuknā を附して動作の完了を表はす.

Woh aurat āpnā kām abhī kar chuki. '彼の婦人は彼の女の仕事を今爲し終りぬ.'

§77. 動詞の語根に他の動詞の不定體を加へて複合動詞を作る, 複合動詞は多く動詞語根の意味を強む.

例 de-denā '捨てる' denā + denā
 so-jānā '深く眠る, 熟睡する' sonā (眠る) + jānā (往く)
 mar-kālnā '殺す' marnā (打つ) + dālnā (倒す)
 le-ānā '運び来る' lenā (取る) + ānā (来る)
 khol-dālnā '弛め落す' kholnā (開ける) + dālnā (倒す)
 jī-uthnā '蘇生す' jīnā (生活す) + uthnā (起きる)
 pī-lenā '飲み乾す' pīnā (飲む) + lenā (取る)
 khā-pī-karnā '食ひ且つ khānā + karnā aur pīnā +
 飲む' (貪食する) karnā

§78. 名詞又は形容詞に karnā, lenā, denā 又は honā 等の動詞を附加して動詞を作る.

taiyar (用意) karnā '用意す'
 sabr (待つこと) karnā '待つ'
 saf (清潔) karnā '清潔にす'
 band (閉づ) karnā '閉づ' (戸などを)
 hazir (現前) karnā '紹介する'
 piyar (愛) karnā '愛する, 戀する'
 pās (そばに) honā '所有す, 持つ'

第十五課

1. Tum likh chuke ho? 2. Jab main wahān pahunchā tab woh khā chuke the. 3. Jab main likh chukūngā tab main tumhāre sath jāūngā. 4. Woh baithkar likhne lagā. 5. Mere kamre men jākar mere kapre lāo. 6. Main yih kām kar saktā hun. 7. Woh abhī nahin jā sakte hain. 8. Tum Hindūstānī bol sakte ho? 9. Hindūstānī aur Angrezi zabān ham ko sikhā sakte ho? 10. Nahin, ham kuchh nahin malūm. 11. Yih larkā āpne sone kā kamre men jā kar aur so-jātā hai.

1.—貴下には書き終りましたか. 2.—私がそこへ到着したその時彼れは既に食ひ終りぬたり. 3.—私が書き終つた時に貴下と一緒に参りましょう. 4.—彼は坐して書き始めぬ. 5.—余の室へ往きて余の衣類を持つて来い. 6.—私はその仕事はすることが出来る. 7.—彼れは今往くこと能はず. 8.—貴下にはヒンドゥスターニーを話することが出来ませうか. 9.—ヒンドゥスターニーと英語とを私に教へることが出来ませうか. 10.—いえ, 私は何も存じませぬ. 11.—この子供は自ら寢室に往きて熟睡す.

第十六章

催起相—その構成法—格の用法

§79. 動詞の催起相は他をして語根の表示する作爲をな
さしめ、又その状態に居らしむるを示す相にして、例
へば

| | | | |
|-----|---------------|-----|-----------------|
| 原始相 | bajuā ‘音する’ | 催起相 | bajānā ‘音をさす’ |
| „ | bhejnā ‘送る’ | „ | bhejānā ‘送らす’ |
| „ | bhijnā } ‘濕る’ | „ | bhijānā } ‘濕らす’ |
| „ | bhignā } ‘濕る’ | „ | bhigonā } ‘濕らす’ |
| „ | bolnā ‘云ふ’ | „ | bulānā ‘呼ぶ’ |
| „ | kahnā ‘云ふ’ | „ | kahānā ‘云はす’ |

即ち原始相に於て自動調なる動詞は催起相となりて他
動調となり、而してこれ等催起相の動詞にして過去分詞
語基に用ひらるゝ時は具格 *ne* と共に用ひらる。(§61 參
照)

§80. 原始相動詞より催起相動詞を作るには以下の方法
あり。

(1) 語根に *ā* を附す;—

uthnā, uthā, uthānā ‘起きる, 起こす’

(2) *ā* の代りに *lā* (又は *āl*) を附す;—

baithnā, baithlā (又は *baithāl*) *baithlānā* ‘坐る, 坐らす’

(3) *o* を附す;—

bhignā, bhigo, bhigonā ‘濕る, 濕らす’

(4) 父音に終る語根はこれを變化す、この時 *i, ī* は *e*;
u, ū は *o* となる。

chhutnā-chhor-chhornā ‘捨てる, 逃がす’

biknā-bech-bechnā ‘賣る, 賣らす’

§81. 格の用法. §5 (2) に述べたる格の用法以外に尙ほ
特殊の用法あり、即ち;—

(1) 屬格の用法.

イ 屬格は時に補助動詞 *honā* の一文の中に現はれざ
る時その代用をなすことあり。

Un shāgirdon kā koī muallim nahin. ‘彼の生徒等には一
人の先生もなし.’

ロ 屬格は動詞の不定體と共に用ひらるゝことあり。
この時屬格は未來の意志を表はす。

Main jāne-kā. ‘余は参りましょう.’

Woh nahin likhni kī. ‘彼の女は書かないでしょう.’

(2) 第一業格の用法.

イ 第一業格は直接法に屬し主格と同じく何等變化せ
ざる事 §5 (2) に於て述べたり。例へば;—

Larkī bulāo. ‘少女を呼べ.’ *Pānī do.* ‘水を呉れ.’

然るに第一業格にして屬格又は他の指示代名詞により
て形容限定せらるゝ時は第一業格に *ko* を附せざるべか
らず。例へば;—

Us barī larkī ko bulāo. ‘その大きな娘を呼んで呉れ.’

Us garm pānī ko do. ‘その湯を呉れ.’

ロ 形容限定せられたる動物を目的格とする時 *ko* を
用ふれども絶対に必要に非ず、無生物をその目的とする

時はその形容限定、不形容不限定の何れにしても ko は必要に非ず。例へば；—

Ham yih bāt suntā hai. ‘私はこの言葉を聞きます。’ (無生物を目的とす)

Merā ghorā lāo.....mere ghore ko lāo. ‘私の馬を持つて来て下さい。’

ハ 他動調動詞は次の場合に於て第一業格を支配す。

(甲) 第一業格にして限定せられたる名詞か、又は一つの限定せる人を表はすとき、

(乙) 第一業格にして固有名詞たるとき。

Mere bare bhā'i ko āpne sath le lo. ‘私の兄を貴下と一緒に連れて往つて下さい。’

Main Aziz ko dekhtā hun. ‘余はアチズを見る。’

(3) 第二業格(爲格)の用法。

イ milnā なる動詞あり‘遇ふ、會ふ’の義を有する時は主格と一致すれども‘獲る、受取る’の義を示す時は動詞は爲格(第二業格)を支配す。例へば；—

Ham us aurat ko milā. ‘余は彼の婦人に遇へり。’

Woh aurat ham ko mili. ‘彼の婦人は余に遇へり。’

Ham us aurat ko roz roz milā kartā hai. ‘余は彼の婦人に毎日遇ふを習慣となす。’ (§65 参照)

Ham ko ek chitthī mili. ‘余は一通の手紙を受取りたり。’

Tum ko kyā miltā hai. ‘お前は何を獲たるにや。’

ロ 不定體に伴はるゝ爲格は不定體の目的を示す。‘khāne ko 食ふ目的で。’ (§67 参照)

(4) 具格の用法。

イ 過去分詞語基の他動調動詞と共に用ひらる。 (§63 参照)

ロ 第二催起相(催起相に多く wānā を附して作る)は時ありて具格を支配することあり。例へば；—

Rājā ne āpne wazīr ko ek sipāhī se bulwāyā. ‘王は己が臣を一兵卒によりて呼び召しぬ。’

(5) 從格の用法。

イ 形容詞の比較に用ひらる。 (§23, §24 参照)

ロ ‘kahnā 語る、教へる、告げる’ ‘pūchhnā 尋ねる、問ふ’等の動詞は從格を支配す。邦語に譯する時は se の代りに ko を補足すべし。

Mard ne sher se kabā. ‘人は虎に語りぬ。’ (§61 参照)

Ek shakhs ne aflātūn se pūchhā. ‘或る人はブラト-氏に尋ねたり。’

Us se pūchhiye. ‘彼より尋ね給ふべし。’

ハ Darnā 等の如く恐怖の義を有する動詞は從格を支配す。

Kuttā sher se dartā hai. ‘犬は虎を恐怖す。’

Woh bandar us kutte se darā. ‘彼の猿は彼の犬を恐る。’

Main tum se darta hun. ‘余は汝を恐る。’

ニ 催起相動詞は具格 ne を支配せずして從格 se を支配す。

Bāp se bete ko daurātā hai. ‘父は子をして走らしむ、走らす。’

Kal main āpne ghore ko dusre sāis se daurwāungā. ‘明日

余は余の馬をして他の馬丁によりて走らしむべし。

雑語

| | |
|------------------------|-----------------|
| Akbar 蒙古王朝の大帝 | bādshāh 帝 |
| Bīrbal アクバル大帝の宰相 | hathyār 武器 |
| larāi 戦争 | zor 腕力 |
| waqt 時 | khatā 消失, 失せること |
| 'arz 祈願 | ausān 勇氣, 氣力 |
| jahān-panāh 世界の保護者, 陛下 | |

第十六課 Akbar aur Bīrbal.

Akbar ne Bīrbal se pūchhā kih larāi ke waqt kyā kām ātā hai? Bīrbal ne 'arz kiyā kih jahān-panāh! ausān. Bādshāh ne kahā kih hathyār aur zor kyūn nahīn khatā? Bīrbal ne kahā jahān-panāh! agar ausān khatā jāwe-ho to hathyār aur zor kis kām āwe? (Practical Hin. Gram. p. 66)

アクバル大帝とビールバル

アクバル大帝は戦ひの時如何なるものが必要なりやとビールバルに尋ねたり。ビールバルは祈りを爲して曰く“お、陛下よ、そは勇氣のみ”と。帝は語りぬ“武器として腕力をば何故に語らざる”と。ビールバルは語りぬ，“陛下よ、若し勇氣氣力にして消衰したらんにはその時は武器も腕力も何の用をか爲さん”と。

第十七章

後置詞一副詞一感歎詞

§82. 後置詞にして格の變化を助くるものは既に §5(2) に於て述べたり。以下屬格に伴はれて名詞に附加せらる。

(1) 男性にして ke に伴はるゝもの;—

| | | |
|--------------|----------------------------------|-------------|
| āge 前 | liye の爲めに | sāth 共に |
| ūpar 上 | binā } 除いて | ba'd 後 |
| liche 下 | bin } | bāhir 外 |
| pār 横はりて | pichhe 後 | tale 下 |
| pās そば | waste の爲めに | samet 共に |
| andar 中 | nazdik そば <small>(從格をとる)</small> | ba-jāe の代りに |
| barābar に等しき | māre を通して, 結果 | kane そば, 共に |

(2) 女性にして kī に伴はるゝもの;—

| | | |
|-------------|-------------|------------|
| khābir の爲めに | taraf に向つて | mānind の如く |
| bābat に関して | nisbat に就いて | jihat の故に |

§83. 最も有用にして普通なる副詞は次の如し。

(1) 時に關する副詞。

| | | |
|-----------------|-----------|-----------------|
| ab (abhī) 今, 唯今 | āj 今日 | kal 明日 |
| kab } いつ | tab } その時 | parson 明後日(一昨日) |
| kad } | tad } | tarson 三日後(三日前) |

agle sāl 昨年(明年) roz roz 毎日 sawere 早朝に
 āj-kal 近頃 phir 再度 abtak 今日まで, 今まで

(3) 態度に関する副詞.

aisā } 左様に jyūn } 左様に chupke 静かに
 jaisā } この様に tyūn } この様に ati 勝れて
 thik 結構, 具合良く kyūn 何故

(4) 場所に関する副詞

yahān こゝ jahān } どこ pare あちら
 wahān こゝ taban } こゝ āspās まはり
 jidhar } どちらへ idhar こちら udhar そちらへ
 kidhar } kahān どちら pār 横たへて

(5) 否定と肯定とに関する副詞

albatta 確かに to 實を云へば, ほんとうに
 aur bhī 尙ほ外に mat }
 bas 十分に na } 否, いゝえ, に非ず
 ya'ne 即ち是れ, とりもなほさず nahin }

§ 84. 接續詞.

agar 若し bhī も亦
 jo, agar 若し—然る時は agarchh と雖も
 par 然し, 尙ほ magar 併し乍ら
 aur 而して亦 pas 故に, 依りて
 nahin to 然らざる時は kih とそのそれ
 goyā であるかの如く goki と雖も
 yā どちらも kyūnki 何となれば
 lekin 然し—と雖も

§ 85. 感歎詞.

ai! } kyā khūb! 如何に佳きことよ
 he! } あゝ kaisī bāt hai! まゝ何としたこと
 o! } (呼格に用ふ) lo! おゝ御覽
 ho! } are! おーい
 chup! 静かに shābāsh! おゝ上出来, 上出来だ

雑 語

gadha 驢馬 nā-khush 不快, 不愉快 rahm 慈悲
 barsāt 雨 dānt 齒牙 almak 馬鹿, 小人
 mausim 季節 hansī 笑 charnā 飽食する
 bāgh 庭園 ziyadā 以上の rahnā 棲む
 tar-o-tāzah 新鮮なる shurū 開始 samājh-karnā 察する, 了解する
 ghās 碧草 cher-chnār 迷惑 kھیāl-karnā 注意する
 chashma 泉水 gustākhi 驕傲 hāsīl 訓戒
 mīthā 甘き, 清き akl 了解 log 人民
 nawāh 附近 zarūr 確かに sher 師子(虎とも云ふ)
 sazā 罰 khel 遊戯 be-wukūf 智識なき

第十七課 Gadha aur sher.

Kisī¹ gadhe ko barsāt ke mausim men charne² ke wāste bāgh kī tar-o-tāzah³ ghās mili⁴, aur pine ko⁵ chashme kā saf aur thandā aur mīthā pānī muyassar āyā. gadhā khā-pī-kar⁶ khub motā hu'ā. Us nawāh men ek sher bhī rahtā thā. Ek dīn gadhā sher ke sath khel karne lagā⁷. Sher ne nā-khush⁸ ho kar dānt dikhā'e. Gadhe ne us ko hansī samājh kar aur ziyadāh cher-chnār shurū

kī⁹. Sher ne kahā kih¹⁰ agar¹¹ yih gustākhi jo tu kartā hai akl ke sath hotī to¹² main tujh ko zarūr sazā detā, magar mujh ko terī be-wukūfi¹³ par rahm ātā hai.

Hāsil;—Bare log abmakon kī bāton par khiyāl nabin karte. (Tweedie's Reader.)

1. (§ 46). 2. (§ 67). 3. (§ 27 (2)). 4, 5. (§ 81 (3)).
6. (§ 74. § 77). 7. (§ 70). 8. (§ 28 (1)). 9. (§ 60 備考).
10. (§ 62). 11, 12. (§ 59. 備考) 13. (§ 23 (2)).

驢馬と師子

或る一匹の驢馬は雨季に於て飽食する目的にて庭園の新鮮なる碧草を獲たり、而して飲料としては泉水の清烈にして甘き水を手に入れぬ。驢馬は食ひ且つ飲みて今やいと麗はしく肥えふとりぬ。その附近に或る一匹の師子も亦棲みたりき。或る日驢馬は師子と共に遊戯せんとせり。師子は不愉快となりて齒牙を表はしたりき。驢馬はそれを笑へるなりと了解しつゝ、それより以上の迷惑を續けたり。師子は告げぬ“若し汝の爲すこの無禮にしてそれと知りてのことならんにはその時は余は汝に確かに罰を與へたりしならんに。然れども余は汝の無智に對して同情す”と。

訓戒;—大人は小人の言葉に對し注意することなし。

雜語

| | | |
|-----------|------------|---------------|
| jhagrā 争ひ | tukrā 裂くこと | chāhnā 望む, 希ふ |
| gawāh 證據 | qāzi 裁判官 | yaqīn 眞實 |

farmānā 宣言する supurd 信用, 世話 nikāl denā 放逐する
rone lagnā 泣き始む sazā 罰 hī 實に
insāf 裁判 supurd karnā 世話せしむ rahnā 立つ
jallād 死刑執行者 khudā kewāste 希くけ, 神に祈りて

第十八課 Do auraten aur ek bachchā kih.

Do auraten ek bachche ke wāste āpas men¹ jhagrā kartī thīn. Koī gawāh nahīn thā. Donon qāzi ke pās gain² aur insāf chāhā. Qāzi ne jallād ko bulāke³ farmāyā kih is larke ko tukre karo aur ek ek donon ko do. Ek aurat yih bāt sunte⁴ hī chup rahī, lekin dusrī rone lagi⁵ aur boli kih khudā kewāste mere larke ke do tukre mat karo. Agar aisā insāf hai to main larkā nahīn chāhtī hun. Qāzi ko yaqīn huwā kih larke kī mā yihī hai. Larke ko use supurd kiyā aur dūs ī ko sazā karke⁶ nikāl diyā. (Practical Hind. Gram. p. 155)

1. (§ 34, āp の於格). 2. (§ 60 備考, jānā の過去分詞, 女性複數). 3, 4, 6. (§ 74, 連續體). 5. (§ 70).

二婦人と一赤兒に就て

二婦人は一赤兒の爲めに相互の間に於て争を爲したることありき、而も何等の證據あらざりき。二人は裁判官の許に往きて而して判決を求めぬ。判官は死刑執行者を呼びて下の如き (kih) 宣言を下せり“この子供を裂け、而して一斤づつ二人に與ふ可し”と。一婦人はこの言葉を聞きて沈黙して立てり。然るに他の婦人は泣き始め而し

て語りぬ “希はくは (khudā kewāsre) 妾の子供を二分することを止めよ、若し判決にしてかくの如きものならんには、妾は子供を要求せざるべし” と。今や判官にこれこそ (yibī) 子供の母親なりとの (kih) 確信は浮びぬ。彼女に赤子の世話を爲さしめ、他の婦人には罪を與へて放逐せりとぞ。

雑語

| | |
|-------------------------------------|-------------------------|
| fidwī 不肖, 臣民 | nāmburdi 上記の者(警官) |
| shakkar 砂糖 | adālat 裁判所 |
| kotwālī 警察所 | ra'iyat 印度の小農 (ryot) |
| kānstabal 警官 (constable) | wājib 理由の存する |
| lāt 蹴ること | faqat 唯だ, 單に……のみ |
| ghūnsā 拳固 | baqqāl 穀物商 |
| tamām 確かに | gali denā 罵詈する |
| lihāzā それ故に | talab farmānā 召喚する |
| umedwār 希ふこと | tabāh hojānā 零落する, 破滅する |
| gharīb parwar salamāt 貧しきもの、安全なる保護者 | |

第十九課 Gharīb parwar salamāt.

Kal fidwī shakkar lene wāste bāzār ko jātā thā jab kotwālī¹ ke pās pahunchā to Nārāyan kānstabal ne mujhko gali dī² aur lāt ghūnse se bahut mārā tamām bāzār ke log gawāh hain lihāza umedwār hun kih hāzūr nāmburdi ko adālat men talab farmā kar sazā den³, nahin to⁴ sab ra'iyat sarkar kī tabāh hojāegī⁵.

Wājib thā 'arz kiya faqat.

'Arzi fidwī Hirā Singh, baqqāl.

1. (kotwāl+i, i は抽象名詞を作る, 警官の居る所; 警察).
2. (denā の過去分詞, §60 備考).
3. (denā の可能法, §58 イ)
4. ('然らざる時は' §84 接續詞)
5. (hojānā の未來, §58 ロ).

あゝ貧しき者の安全なる保護者よ

昨日不肖が砂糖を求むる爲めに市場に往き警察所の側に至るや警官ナーラーヤン氏は余を罵詈し且つ蹴り且つ拳固にて甚だしく打ち、確かに市場の人々は證人なるを以て閣下に上記の者を裁判所に召喚し罰を與へられんことを希ふ。若し然らざる場合に於ては政府の (sarkar kī) 小農は總て破滅するに至らん。

理由の存せるにより唯だ訴へたるのみ。

穀物商臣ヒーラーシンの請願。

雑語

| | | |
|----------------|---------------|----------------|
| ūnt 駱駝 | kān 耳 | mu'āf karnā 許す |
| ittifāqan 或動機で | milnā 遇ふ | safar 旅行 |
| utarnā 中に入る | rāstā 道 | chale ānā 進み來 |
| naddī 河 | sach honā 眞實だ | pet 胃, 腹 |
| dūbjānā 溺死する | | |

第二十課 Ūnt aur gadhā kih.

Ek ūnt aur gadhā bare dost the. Ittifāqan donon sath

safar ko gae. Rāste men ek naddi mili¹. Pahlē ūt pānī men utarā. Pānī uske pet tak āyā. Ūnt ne kahā kih, yār! chāle āo, pānī thorā hai. Gadhā bolā kih, sach hai; pānī tumhāre pet tak hai, lekin, mere to kār tak hai. main dūbjāungī. Āge jāiye², mujhko mu'af kijīye³.

1. (§81 (3) イ) 2; 3. (§58 ハ)

駝駱と驢馬とに就て

一匹の駝駱と驢馬は大の友達なりき。或る動機より兩者打揃ひて旅行に往きぬ。道中にて一の河に遇へり。第一に先づ駝駱は水中に入れり。水は彼の胃袋の附近まで來りぬ。駝駱は語れり“おゝ友よ、進み來る可し、水は少々なり”と。驢馬は語りぬ“そは然り、水は御身の胃袋まで來る。然れども余にすれば實の耳のあたりまで來りて余は溺死せん。希はくは御身は前に進まれよ、余を許し給へ”と。

雜語

| | | |
|----------------|---------------|--------------------|
| kauwā 烏 | zarūr 必要 | maghz 果肉 |
| akhrot 胡桃 | ni'mat 樂み, 慈悲 | khud gharaz 利己 |
| gilehri 栗鼠 | āsān 容易なる | salāh 忠告 |
| chonch 嘴 | tadbīr 計畫 | tornā 壞る, つゝく |
| asar 効果, 効能 | patthar 石 | uthānā 感ずる |
| zahmat 苦痛 | chatān 角の面 | ban-parnā 適當になる |
| mazā 味佳き, 佳味なる | sadma 打撃 | batānā 告げる, 教へる |
| sakhtī 堅固 | lejānā 取り運ぶ | chhor-denā 落す, 捨てる |

utārnā 下る girnā 落す chal-denā 逃げ去る
hojānā 起る chhor-jānā 残る

第二十一課 Kauwā, akhrot, aur gilehri.

Ek kauwā akhrot ko chonch se tor-rahā thā; magar akhrot par kuchh asar nabīn hotā thā. Gilehri ne dekhā, aur kauwe se kahā¹ kih kyūn itni zahmat uthātā hai? Kauwe ne kahā kih main ne sunā hai kih akhrot bahut maze kī chiz hai; aur jab khuda ne is sakhtī ke sath is ko band kiyā, zarūr is ke andar, kuchh barī ni'mat hogī; so, main jis tarah ban-paregā is ko tor-kar rahūngā². Gilehri ne kahā kih main ek āsān tadbīr bataūn; akhrot ko barī dūr hāwā men ūpar lejā kar, patthar kī samne-walī chatān par chorde³; girne ke sadme se khud pāsh pāsh hojāegā. Kauwe ne aisā hī kiyā. Lekin niche utar kar kyā dekhtā hai? kih waqt men akhrot to pāsh pāsh hogayā, magar maghz gilehri le kar chal dī⁴, sirf chhilke chhor gāi.

Hāsil;—Khud-gharaz ādmī, jo salāh detā hai, us men kuchh na kuchh apna fāidah zarūr soch letā hai.

(Tweedie's Reader, pp. 113-114).

1. (§81. (5) ロ). 2. (§77). 3. (二人稱單數命令法, §58 ハ). 4. (denā の過去女性, §60 備考).

烏と胡桃と栗鼠と

一羽の烏が胡桃を嘴にて啄きつゝありき、然れども胡

桃に對して何等の効能現はれざりき。栗鼠は(これを)見て而して烏に語りぬ“何故にかゝる苦みを爲すにや”と。烏は答へぬ“余は胡桃の大變佳味なるものなるを聞けり。而して神がこの堅固を以て胡桃を閉ぢ込むや(jab) 必要なるはその中にあり。(その中に)或る非常なる樂みあるべし、故に(so) 余は如何なる方法か適當なるにせよ、それ(胡桃)を啄きつゝあるなり”と。栗鼠は告げぬ、“余は一つの容易なる計畫を教ふべし、胡桃をば遠方遙か空中に持ち上りて石の角面に捨て落せ。落つる勢にてそれ自ら(khud)にて滅茶々々になるべし”と。烏は實にその如くに爲せり。然れどもトに落して如何にして見るを得べき。實にこの時(kih waqt men) 胡桃は言の如く(to) 滅茶々々に破れたりき、然れども栗鼠は果肉をば取りて逃げ去りぬ。唯だ外皮のみ残れり。

訓戒;一利己主義の人にして忠告を興ふる人(jo)あり。その忠告の中には必ず或る己れの利益必要を考ふるものなり。

第二十二課 必要なる短文

(1) 命令

Idhar āo. こちらへ來い。

Nazdik āo. そばへ來い。

Mat bhūlo. 忘れてはならぬ。

Jaldi karo. 急いで爲せ。

Mere naukar ko bulāo. 私の召使を呼べ。

Ahiste jāo. 静かに往け。

Jawāb lāo. 返事を要す。

Jaisā ham boltā waisā karo. 私の云つた通り爲せ。

Yih chitthī lejāo. この手紙を持つて往け。

Ghari rokho. 馬車を止めよ。

Wahān mat jānā. そこへは往かないように。

(2) 質問

Tum kaun ho? あなたは誰れですか。

Woh kaun hai? 彼れは誰れですか。

Tum kyā karte ho. お前は何をしておますか。

Meṛā naukar kahān hai. 私の召使は何處におますか。

Kidhar jāte ho. あなたはどちらの方へ參りますか。

Woh kiskā ghar hai. これは誰れの家ですか。

Kitne hain. どれだけ程ありますか。

Tumharā nām kyā hai. あなたの名前は何んと申しますか。

Uska nām kyā hai? 彼れの名前は何と申しますか。

Āp kaisā hai? あなた御機嫌如何です。

Tum aisā kyūn karte ho? お前は何故左様なことをするか。

Kyā hū'ā? 一體何事か。

Tum usko jante? お前は彼れを知つておますか。

Tum bol sakte ho kih "A" sahib kahān rahtā hai? お前は“A”さんは何處に棲んで居られるか教へて呉れることが出来るか。

Tum ko malūm hai? 貴下は承知しておますか。

Tum kaunsi kitāb parhte ho? 貴下はどんな種類の書籍

を讀むか。

(3) 對話

Is chiz kyā kahte ho? この品物は何と申しますか。
Tum angrezī bol askte? 貴下は英語を話すことが出来るか。

Tum kyā bolte? 何を云つてるのか。
Aisi jaldī mat bolo. そんなに急いで話すな。
Tum sunte ho? お前は聞きますか。
Usko phir kahō. もう一度話して呉れ。
Usko bolo, jaldī ānā. 早く来いと言つて下さい。
Āj dhobī āyā hai? 今日は洗濯屋は来るか。
Is sanduk kholo aur khali karo. この箱を開けて空
にして下さい。

Āp kā hukm kyā hai? 御命令は何でございますか。
Un chizon kesath lekar āo. その品物と一所に来なさい。
Sab chiz garī men rakh-do. みな品物を馬車へ入れて呉れ。

(4) 食事

Hazirī taiyar hai? 朝飯の用意は出来たか。
Chā bānāo. 茶を作つて呉れ。
Roti senko. パンを焼いて呉れ。
Kuchh andā deo. 何か鶏卵を呉れ。
Yih pānī kaulta hai? この水は煮沸したのか。
Kuchh makkan lāo. バターを持つて来い。
Khānā taiyar karo. 御飯(夕飯)を用意して呉れ。
Khānā kab taiyar hoga? 御飯は何時出来上るか。

Yih gosht achebhā (thik) hai. この肉は結構だ。
Churī aur kantā lāo. ナイフとフォークを持つて来い。
Ham khā chuke hai. 私は食事を終つた。
Ham bahut bhukā hai. 私は大變空腹を感じる。
Dekho, kaun hai. 誰れだか見て御覽。

(5) 時間, 天氣

Abhī kyā bajā hai? 只今何時ですか。
Thik tīn bajā hai, sahib. 旦那, 只今正三時です。
Āp kā 'umr kyā hai? 貴下の御年齢は。
Woh ādmī bahut burhā. その人は大變年寄りだ。
Yih bahut achebhā mausim hai. 大變結構な時候です。
Bahut garmī hai. 大變暑い。
Āj barstā hai. 今日は雨降りです。
Pānī partā hai. 雨が降ります。

(6) 分量, 買物

Kitne seer tol-ke hai? 合計で幾セールですか。
Yih chiz bahut sastā hai. この品物は大變安い。
Yih topī kā dām us se mahngā hai. この帽子の代價はそれよりは高過ぎる。
Yih rupyā chhotā karo. この留比を少さくして下さい。
Āp ko kyā chiz chahiye? 貴下は何をお求めですか。
Seer bhar kyā dām hai? セールに就ての價は幾何だ。
Tarāzū men rakh kar tol karo. 秤に掛けて正味を量つて呉れ。

(7) 數量

Do aur ek tīn hote hain. 二つと一つで三つです。

Abhī pahle kyā karne hogā? 先づ第一に何を爲さねばならぬか。

(8) 雜事

Yih kiskā bāgh hai? これは誰れの庭園ですか。

Mali! yih kaisā phul hai? マリー、これはどんな種類の花か。

Is darakht kī bahutsī daliyān hain. この樹の枝の實に多いことよ。

Yih darakht jaldī phulegā. この樹はもう直ぐ花が咲きます。

Is kism kā mewā achēbhā hai. この種類の果實は結構だ。Ko'ī hai? 誰れか居るか。

Jaldī kyūn nahīn ā'e? 早く何故來なかつたのか。

Āp kyā chāhte hain? 貴下は何を望みますか。

Sahīb ghar men hai? 主人は御在宅か。

Nahīn sahib, abhī woh bahir gā'e hain. いゝえ旦那、主人は只今外出せられました。

Achēbhā, tum jante ho kih kab phir awenge? 左様か、お前は何時お歸りか知つてゐますか。

Ham ko malūm nahīn, sahib. 私は存じてゐませぬ。

Ham ko ek achēbhā naukār chāhiye. 私に一人の良い召使が入用だ。

Ham tum ko das rupyā mahīna denge. 私はお前に一ヶ月十留比與へましょう。

Jab woh ādmī ā'e to ham ko bolo. 彼の男が來たら私に云つて呉れ。

Dekho, khansāme se kaho kih sāt baje kewaqt khānā taiyar karo. これ、七時に御飯を用意するやうにカンサーマに云つて呉れ。

Āj-kal bāzār men kyā kyā gosht hai? 近頃市場にはどんな肉があるか。

Khudāwand, har qism kā gosht hotā hai, gā'e kā gosht, bher kā gosht, bāchhre kā gosht aur hiran kā gosht bhī hotā hai. はい旦那、牛肉に羊肉、仔牛の肉にそれから亦鹿の肉も大概の種類はある筈です。

Is mausim men kaunsā gosht sab se tazā rahegā? この頃の氣候でどんな肉が永持ちするのでしょうか。

Tum nahīn imāndār ho. お前は不正直だ。

Woh merā dost hai. 彼れは私の友達です。

Woh chor hai. 奴は盜賊だ。

Woh yahān rahtā hai? 彼れは何處に棲んでゐるか。

Tum usko jante ho? お前は彼れを知つてゐるか。

Delhi ko yahān se dūr hai? デリーまで此處から遠いですか。

Delhi ko kaunsā rastā? デリーまでの道はどちらですか。

Ham usko do seb diyā hai. 私は彼れに二個の林檎を與へたり。

Naukar abtāk nahīn āyā hai. 召使は今尙ほ參りませぬ。

Ham akelā jā-ūngā. 私は獨りで參りましょう。

Ham yih kām kar saktā hai. 私はこの仕事はすることができぬ。

Abhī ham tum ko kuchh nahīn de saktā hai. 只今私はお

前に何も興ることが出来ぬ。

Kaun kah saktā hai kih kāl kyā hogā. 誰人か明日何が
起るかを告げ能ふべきぞ。

Ham wahān nanin jā saktā hai. 私はそこへ往くことが
出来ぬ。

Us ko jāne do. 彼れをして往かしめよ。

Ham baith kar likhne lagā. 私は坐わりて書き始めた
り。

Mere bāp ne kabā kih ham tum ko nahīn jāne deūngā. 余
の父は語れり“余はお前をして行かしめないのであら
う”と。

Us ko gāne do. 彼れをして歌はしめよ。

Woh larne aur dasre ko marne lage. 彼等は争うて相手
を打ち始めぬ。

Tum kahān se āte ho? お前はどこから来たか。

Āpkā hukm kyā hai? 御命令は。

Chale jāo, tum ko kuchh nahīn. 出て往け、お前に何も用
はない。

Khāne ke ba'd āo. 御飯後にお出でなさい。

Merā hukm suno. 私の云ひ付けを聞きなさい。

Agar tum isko lete to tumhāre liye bihtar hotā. 若しお前
がこれを取つたならばお前の爲めにより良かつただら
うに。

Use chhor deo. これを捨てよ。

Merī chābī nahīn hai. 私の鍵がない。

Woh āpasmen Hindūstānī bolte hain. 彼等は相互の間に

てヒンドゥスターニーを話す。

Bahut mihrbānī tumhāre sahib ko bolo. お前の主人に丁
寧にお禮を云つて呉れ。

Bāzār ko jāo aur sab zarūrī chizen khasido. 市場へ往つ
てそして總て必要な品を買つて來い。

Is station se Calcutta ko first class ke ticket kitnā dām
hai? この停車場からカルカッタまで一等の切符は幾
何の價ですか。

Kitnā baje men Bombay ke liye train (garī) āegā? 何時
にボンベイ行の列車は來るか。

Ai, coolie, merā sab chīz 1st class men lejāo. おゝ苦力、
おれの總ての荷物を一等室へ運べ。

Oh boy, koī coolie jaldi bulāo. おゝボーイ、誰れか一人
の苦力を呼べ。

Booking office kahān hai? 出札口は何處か。

Luggage office kahān hai? 荷物取扱所はどこか。

Ham ko ek 1st class kā ticket chahiye. 一等の切符を一
枚お願します。

Calcutta ke liye train (garī) kitnā number ke platform
men pahunchegā? カルカッタ行の列車は何番のプラッ
トホームに著くか。

Is train men dining-car bānātā hai? この列車は食堂車
付きか。

Babu-jī, mere liye ek 1st class kā seat reserve keriye
(kijiye). バブヂー、私の爲めに一等席を一つレザーブ
して下さい。

Sab chiz gari men rakhi-do. 荷物を全部馬車へ積み込めよ.

Ek tongā jaldi taiyar karo. 一臺のトングを至急用意せよ.

【終】

發行所

東京市神田區表神保町三番地

東

振替東京二七〇番

京

堂

印刷所

秀英舎第一工場

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行者

菅谷憲治

東京市本郷區西片町十番地

著作者

廣瀬了乘

不許複製

大正六年一月十五日發行
大正六年一月十一日印刷

定價金參拾錢

323

247

終